

○ \* ○ : ○ \* ○ : 姫ノ語 .  
○ \* ○ : ○ \* ○ :  
○ \* ○ : ○ \* ○ :

ロベオン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

古城 緑は生粋のお嬢様。

優しい両親、兄姉、使用人達に囲まれて平穏な日々を過ごしている——筈だった。

ひよんなことから学校で黒い影を目撃した緑。

すると自体は一変、様々な怪奇現象に襲われる様になる。

迫り来る影から、彼女は逃げ切り、生を勝ち取る事は出来るのか………!?



十三章

1 輪の……



128

十四章

桜舞とカリナの関係



149

## 一章

## 古城家の一日

あてんしよん

完全に作者の妄想です

素人です

初投稿です

投稿が不定期かもしれ

ません

など色々不十分な所があるかもしれませんが

それでも大丈夫な方はお進み下さい。

苦手な方はブラウザバックを推奨致します。

## 第1章

…  
 ♪\*♪…\*♪…\*♪…\*  
 …

「うーん…」

















## 二章

どうでもいいけど……。

てんしよん

前回と同じくです。

素人

完全なる著者の妄想

など様々です。

残酷な描写使用（追加）

話の展開大幅変更など色々あります。

1章の様な話が好きな方申し訳ありません。

苦手な方はブラウザバックを推奨致します。

だいぶ最初の投稿をいじってしまいました。

申し訳ありません。

2章

……誰?……

♪：\*♪：\*♪：\*

ごきげんよう。急にで申し訳ないのですが、今登校途中ですの。なんだか知らないけれど、黄熊（ふう）がとても焦った様子で私を学校に連れて行きますの。

あら、学校に着いたようだわ。校舎内を歩いて教室に向かいますわ。

?黄熊がいない...

いつもは教室まで私を送ってくれるのに。それどころか、今日はやけに学校が静か...。まるで誰もいないかのよう。?なんだか様子がおかしい。教室に入っても誰もいない。

...!?

ま、窓花様?

先生がいるはずの教卓の上に窓花様が寝ている...

おそるおそる近寄ると、音も立てずに窓花様の頭がこちらを向いた。

...!!!

いつの間にか口元を手で覆い後ずさりしていた。

... つうあああ! やつと声が出たと思っただが、もう声が出ない。喉がカラカラに乾いてしまった...。窓花様だと思われるその人は顔が無かった...。無いと言うよりも顔の皮膚を剥ぎ取られたかのように内側の肉と骨が丸出しになっている...。誰?... 私



しなければならぬのですが、私にはこの状況が恐ろしくてなりません。カタカタ

震え過ぎよ。黄熊。

私もこの原因不明の状況がとても恐ろしいけれど、黄熊がこの状況だから私がしつかりしなければ……。でも、どうしたら良いのかしら。

少女思考中

10分後　うーん。

30分後　うーん。

うーん。考えようとしても頭が上手く動かない。しようがない。黄熊。少し歩きましようか。

ここまで時間かけてそれだけですか!?

ええ。だってしようがないじゃない。どんなに考えても蓮お兄様の作るマカロンしか思い浮かばないんだもの。

どうでもいいけどマカロン食べたいわ。

まさかの「どうでもいいけどマカロン食べたい」ですか!?!あの超有名なボカロのやつ



ですよ？どこで知ったんですか？家にはコンピュータなどの電子機器は無いはずなのに……。

ふふ。窓花様から教えて頂きましたの。でも、「ぼかろ」とは何のことですか？この前蓮お兄様のマカロンが美味しくて話をしていたら、窓花様が教えて下さいましたの。

そ、そうなんです……。ボカロの事は今度説明しますね。

あらそう。ではとりあえず行きましようか。

はい。

……………

珍しい事もあるのですね。まさかお嬢様があんな事をおっしゃるなんて。でもお嬢様のお陰で緊張がとけました。ただのメイドの内の一人にしか入らない私を励ましてくださるなんて。とてもお優しい方です。そして、こんな状況でも全く取り乱したりしない。本当はとても不安でいらっしやるはずなのに……。お嬢様はお強い方ですね。こんな方を主に持てて黄熊は幸せです。

……………

しばらく歩いて行く内に分かったことが一つあります。それは見て回った所出口が無いという事です。昇降口はあっても出口が壁になっていたり、窓はコンクリートに直接ガラスが埋まっていたりしています。ガラスは強化ガラスのようで、いくら叩いて

も割れません。何かしらここでやらなければいけないようです。

き？あの教室だけ、明かりがついている……。なかを覗くとパチパチと音を立てて炎が燃えていた。危ない。机の上でコンクリートを置いて紙を置いて火を付けただけ。下手したらこの教室燃える……。というかここ全体燃える。

カタン

!?

ザシユツ

ドツ

な、何か起きた……。いつの間にか瞑っていた目をあけた。

！ぶ、黄熊が……。黄熊が。左腕を押さえて私の前でうずくまっていた。

申し訳ありません。お嬢様……。お嬢様の髪の毛が少し切れてしまいましたね。

！今まで気づかなかったけれど、髪の毛がひとふさ舞っていた。

何が起こったの？怪我は？

いえ。怪我はありません。今お嬢様はこの得体の知れない物に襲われそうになったのです。

……。目の前に黒い物が転がっている。

ちよつと！ひどいじゃないか！溝落ち殴られて苦しんでる人に向かって黒い物とか

得体の知れない物だなんて！

？貴方は誰ですの？

俺？俺はレオン。苗字は産んだ人に聞いてくれ。ちなみに言いにくかったらレオでもいいぜ。

…。

おい！黙るなよ。

…。

何かツコつけてんですか？

ちよつと黄熊。初対面の物に向かって失礼よ。

お前らなあー。さつきから俺の事を物つて連呼してるけど、俺人間だからなく。

そんなこと知った事じゃないけど、さつきお嬢様に何をしようとしたの？

黄熊がアクリル棒を構えてレオの事を睨んでいる。今まで見た事のないような鋭い瞳で。

つて黄熊？何故アクリル棒？あの理科の実験で使う物？

これはお嬢様の身をお守りする為の物です。常に旦那様から頂いたので持っています。す。

そ、そうなの…。ありがとう。

あのな、俺はお前らのコントを見に来た訳じゃないんだよ。

「こんと」とはなんですか？

今度私が説明しますから！

話に戻らせてもらうが、俺も被害者なんだ。いきなり変なやつに殴られて気づいたらここだったんだ。

私達が被害者に見える？

！やっぱり敵か？

違うわよ。お嬢様を学校にお送りしたらこの状況なんだから。

なんだ。びつくりしたなく。

それと、あなたさつきから失礼よ。この方が誰だと思っているの？

制服コスが趣味の人？

シユツ 黄熊がアクリル棒でレオの鼻を殴る。

つて。すみませんねー。このメイドは冗談も通じないかなー。

お嬢様を侮辱するなっ。

今まで聞いた事のないような低く恐ろしい声で黄熊が怒鳴る。

あー？どうせどこそこのお嬢様だろ。メイド連れてて語尾に「ですわ」使つてりや誰でも分かるよ。だがな、お前らも気おつけなきやいけないと思うぜ。何たって俺はシリ

アルキラーだからな。

ペろりと舌を出してレオは言う。

しりあるきらー？

今度説明しますから！

この時初めてレオの素顔が見えた。整っているけれど、何処か幼さを感じさせるその顔は鏡音レ〇の様だった。

え？自主規制が入ってるって？知らないわよそんなの。つていうか誰よ？

？お前んとこのメイドは幽霊でも見えんのか？

さ、さあ？私も分かりませんわ。

だつて。1人で喋ってるじゃねーか。

きつと見えない何かと戦ってくれているのよ……。

おいおい……。お前もまた随分とポジティブだなー。

あそのこのサイコパスメイドと言ひ、頭お花畑のお前と言ひ大丈夫かよく？  
ガンツ

誰がサイコパスよ？誰が頭お花畑よ？

レオが頭を押さえてうづくまっていた。

つてー。お前俺の事殺すつもりか？

うるさいっ！次お嬢様を侮辱したら2度と陽の光を見れないようにしてやるっ！  
こえー。そう言えば、お前らこれからどうすんの？見た所この事なんにも知らない  
ようだし。

！そ、そう言われて見れば…。

まあ俺が知ってる事全部教えてやっても良いけど？その代わり代償は払って貰うけ  
ど。

何が目的よ？

黄熊がじろりとレオを睨む。

？

代償って言ったじゃない。

ああ。そくだなー。まだ細かくは決めて無かったけど、命かなあ。分かんないけども  
らう時に決める。言っとくけど、俺物凄い馬鹿なんだわ。ここ、とにかく謎な事が多い  
からなー。

ここを出るのを協力してくれって事？

ああ。そうなるなー。

別に良いですよ。

！お嬢様？



# 黄熊さんはツンデレかっ!?

3章 …… 檻…… ?

♪：\*♪：\*♪：\*

俺の知っている事はー…。

そう言いかけた時だった。激しい金属音が鳴って視界がシマウマ模様になったのは。

!?

檻に閉じ込められた…。

お嬢様!ご無事ですか?

ええ。大丈夫よ。黄熊(ふう)。

アワアワ よ、良かったです(汗) お嬢様に何かあったら…私どうしたら…。

あー(棒)

黄熊がレオをアクリル棒で殴りながら嘆いていた。

うぐつ。つてめエ、うつ、やめつ、うぐう…。

完全に伸びている。

それよりもこの檻は…。



うう……。ご、これワ……。？。。。(ゴフツ

レオが吐血した……。殴り過ぎよ黄熊……。

ダラダラ　　ごレわ　おれがいまゐるおうどじだやづだ……ダラダラ

うわあ。日本語めちやくちや……。

でもどうやらレオはさつきこの檻の事を伝えようとしたらしい。

——とりあえずここを出ないと……。

ゴホツ！エホツ！……たくよー。人を流血させやがって何が楽しいんだこのサイコ

パスメイド。

いえ、素振りをしていたらつい。

はあ!?このクソ狭エ檻の中で素振りする馬鹿がいるか!?サイコパスメイドは頭まで

イカれてんだな。

貴方が私の目の前にいるのが悪いんでしょう。当てるつもりは99%くらいしか無

かったのに。

お前それほぼ当てるつもりじゃねーか!!!

ま、まあ落ち着いてください二人共。まずはここから出ることが先決よ。

まーそうだな。此処から出ねーと派手に此奴と殺り合う事も出来ねーし。

そんな汚い言葉を発さないでくれる!?

るせーよサイコパスメイド。手前は黙ってな。

な…! あんた、此処から出られる手段でもあるって言うの!?

だー! それを探してんだよ、今。話しかけられつと気が散るから手前は手前のお嬢さんの相手でもしてな。えーと繋ぎ目は…(ブツブツ)

黄熊との言い争いをやめたレオは、鉄格子の繋ぎ目を何やらガチャガチャと弄り始める。一本一本、とても丁寧に確かめていく様子は、意外と几帳面なのかもしれない。

んー…。ここならイケそうだな。おい、サイコパスメイド、今俺が指で押さえてる場所その棒で叩けるか?

出来なくはないけど…どうするつもりなの?

良いから黙って叩け。あ、一ミリでもずらすなよ? ずらすと面倒だからな。

黄熊。お願い。

…分かりました。あんたがしくじらないでよ?

わー! ってるっつの。

指示を受けた黄熊がアクリル棒で鉄格子の繋ぎ目を思いつき叩く。すると、ピシッ、という音が響く。

!?! 何、今の音は…

おー、ビンゴ。あとは…う、ぬう…おりやあつ!!!

す、凄い。レオが、素手で鉄格子をぐにやりと曲げたのだ。一人分空いた空間から、レオが真つ先に脱出する。

あー、手が痛エ。普段は物ぶつ壊すのにしか使えねエ馬鹿力が、ンな所で役立つとはな。ほら、さつさと出ちまいな。お嬢様とやらと、サイコパスメイド。

ふーん。あんたも意外と役に立つのねー。

てめえはさつきから失礼なんだよ。

…黄熊。助けてもらつたのだからお礼くらいは言わないと。

…申し訳ありません。じゃあここは一つ貸しにしとくわよ。言つとくけどお嬢様じゃないからねつ。私とあんたとの貸しだからお嬢様を巻き込まないでよねつ。

素直じゃない奴だなあ。俗に言う、「ツンデレ」ってやつ?…プツ。ツンデレサイコパスメイドとか笑えるんですけど!!カタカナばかりじゃねーか!!!

だあれがあんたに照れなきや行けないのよ!自惚れんのもいい加減にしなさいよねつ!?!この怪力男!

ああ?暴力女に言われたくはねーよ!…おっと、ツンデレサイコパスメイドだったか。すまんすまん。

もう知らないつ。こんなのはほつといつて行きましようお嬢様。

…ええ。

黄熊はレオの事が好きなのかしら?でも「つんでれ」の意味がやっと分かりましたわ。  
さあお嬢様。行きましょう。

ガタガタ

ガタガタ

ガタツ

ガダツ

ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ

開かないわね…。

ちよつと、アンタ開けてよ!!

んー?俺なんかほつといて行くんじゃ無かったのか?ツンデレサイコパスメイドさ  
んよ。

うぐつ…。さ、さっきのは取り消すから!兎に角開けて!!!

なんだ、もう少し頑張るかと思っただのに、諦め早えーなー。

うるさいっ!この怪力男!

へい、へい。…何だ、この扉。まるで外側から凄い力で押されたような歪み方してん  
じゃねーか。めんどくせー歪み方だなあ…。

…あの…、他を探しませんか?簡単に檻は出られるようになっていたと言うことは、

他に罣があつてもおかしくないと思います。それにこの先レオ様がいないと困ります。なので、お願いします。今までの黄熊の無礼は私が謝りますので、また一緒に行動してくれませんか？

申し訳ありません。お嬢様…。私めのためにお嬢様が謝つて下さるなんて…。

緑に深々と頭を下げられて、思わず肩を竦めるレオ。

あ、いや、その…アンタ…ゴホン、お嬢さんが頭を下げる必要はねエよ。大方からかつてンのは俺だし…。…まあ、何だ。…俺も力だけの馬鹿だから、一緒に行動するのに文句はねエ。けど、その”レオ様”って呼び方はやめてくれねーか？背中がムズ痒くて仕方ねエんだ。”レオ”でいい。その方が俺も聞いてて違和感ないし、楽だろ？

そ、そうですか？目上の方にはつけるように教えられてまして…。では「レオさん」でどうでしょうか？流石にお世話になる方に向かつて呼び捨てはどうかと思ひますので…。

”レオさん”ねエ…さん付けされる程、アンタらと歳は離れてねエと思うんだが…。あの…。お嫌でしょうか？もしお嫌でしたら頑張つて直しますわ…。

…あー。ほんとに生粋のお嬢様だな、アンタ。…まあいいよ、”レオさん”で。やっぱ背筋がぞわぞわするけど、これ以上文句つけるとまたお前ん所のサイコパスメイドに殴られそうだしな。ありや流石に痛エわ。

…ありがとうございます…!

お嬢様っ!?!こんな男に頭を下げられる必要はありませんよ?全くあんたはお嬢様の純粋な所を利用して頭を下げさせるなんてっ!最っ低っ!

下げさせるも何も勝手に頭下げてきたんだろーが。…というかそもそもその原因はテメエだよ。テメエの無礼詫びるつつつて頭下げてんだからな。

はあ…。申し訳ありませんお嬢様。

じゃあそろそろ探し始めましょうか。

ああ…。お嬢様が天使に見える…。この笑顔は天使よ!まさにエンジェルスマイル!

おい、何ニヤけながらぼーっとしてんだサイコパスメイド。下らねエ妄想は此処を脱出してからにしやがれ。…あー、緑とか言ったか?

は、はい。何でしょうか…?

俺はアンタの事緑って呼ぶからな。…後、高い所にあるモンとか、ぶっ壊してエものがあんなら言ってくれ。…因みに、今の俺の所持品はライターと煙草、小型ナイフ、キーチェーンだ。何か使いたかったらこれも言ってくれ。…まあ、何もなさそうな感じだったらドア蹴破るけどな。てな訳で宜しく。

あの…。煙草は吸わないで頂けると…。一応学校ですし、未成年ですので…。

んあ?…吸わねエよ。これはダチからの貰いモンだし、俺はどうも煙草が苦手なタチなんでね。どっちかつつたら、酒の方が飲めらア。

お、お酒飲まれるんですね…。

まーな。見てくれでわかるたア思うが、不良だし。仲間同士で連ンでる時に、よく一気飲み勝負してたしな。酒はそれなりにイケる口なんだ。

そ、そうなんですな…。まあ人それぞれ好きな物はありますものね(汗)

ふーん。注意しねエんだ、緑は。あ、お前は真似すんなよ?普通は飲まねー方がいい代物だし、アンタにや紅茶とかそっちの方が似合いそうだ。

はい。ご忠告ありがとうございます。確かに私は紅茶が好きですわ。優しい所もあるのですね。黄熊も今は少し慌てていますが、普段はとても優しいのですよ。どうか黄熊にも優しくしてやって下さいね。

ああ、眩しいっ!白過ぎて純粹過ぎて眩しい…!天使だ!この世にも天使がいた!

優しい、ねえ…。全くそういう風には見えねエよ、俺には。つーかこのサイコパスメイドさつきからニヤニヤしてて気持ち悪ーし、優しくすんのは厳しいな。何よりムカつくし。ていうか俺はンな優しくねーぞ?寧ろ乱暴とか暴力野郎とかそーいう肩書きもつてるクズ。氣イつけな、緑。

そうですか?それでも私には優しく見えますよ?

ははっ！こりや参ったな。…んな風に褒められたのも随分久しぶりすぎて、つい笑っちゃまったよ。ありがとな、緑。…そっくりだな、アイツに…。

よし。そんじゃそろそろ探すか。



## 四章

名乗れつつつてんだよ！

うーん。それにしても何も無い教室ですわね。

そう？ちよつと待って。

カチャカチャ

ガチャリ

この金庫開いたわ。

ええっ？金庫なんてあつたんですか!?

器用な奴だなア……。ダイヤル式の金庫をあつさり開けるなんて。……。どれどれ。ん？

鍵と……はあ？スポンジい？何処で使うんだよんなモン……。

レオさん。とりあえず両方持つていきましよう。鍵はきつとあつちの方のドアの物でしよう。さつきあそこのドアだけ鍵がかかっているのを知りました。スポンジは……きつと何かの手がかりです。この先必要かも知れませぬ。

はいよ。……あり？鍵合わねーぞ？

……あの、上下逆ですわ……

……。マジか。

ガチャ：

扉が開いた。

外はやつぱり廊下。

あの、お嬢様……。どこで金庫なんて見つけたのですか？

ああ。えつと……。黒板の裏に引つかかっていたんだけど……。でも黒板の裏には金庫以外何も無かつたわ。

：おいおい。黒板の裏にあるモン引つ張り出すとか随分無警戒だな……。なんか罠が作動するとか考えなかつたのか？お前。

あつ……。

：つたく。これだから緑には世話焼いちまうんだよ。：いいか？この学校はもうお前が知ってる学校じゃねエ。：いや、むしろお前が知っていた学校と変わりはねエのかも知れん。だが、それはあくまでも表の学校に過ぎなかつたって事だ。偽りさ、全て。きつと、今のこの学校の方が実際の姿なんだ。だから、気を引き締めておけ。もう、此処は安全な場所でも、ダチと笑い合う場所でもねエ。ただ、俺達を捕らえ、そして殺そうとしている牢獄だ。

：レオさんは殺されそうになったのですか？私達は来たばかりで分かりませんが、まだ檻に閉じ込められただけで殺されそうになった事はありませんわ。

…あの檻もな、仕掛けはあったんだよ。俺も最初は、ここに閉じ込められた。んでよ、無理やりこじ開けようとしたら、足元から刃物が出てきやがった。

…！

いやあ、咄嗟に鉄格子離したら引つ込んだから無事な訳だけだな。んで、しょーがねーから得意じゃねー頭使ってたら、天井にボタン見つけて、それ押したらお前らんところに落ちたつて訳。

それじゃああの炎は…。別の人が付けたのかしら…。それとも仕掛け？ううん。今はそんな事を考えても仕方が無いわ。

じゃあ黄熊がアクリル棒で叩いたからその仕掛けが解除されて…。賢くていらっしやるのですね。私には到底わからない仕掛けですわ。

あ？賢い？…別に、ボタン以外何もなかったから押したただけだ。サイコパスメイドがアクリル棒叩いて仕掛けが解除された理由もわかんねーし。要するに、勘つてやつ。

そ、そうなんです…。でも時には勘も必要だと言う事が学べましたわ。それではそろそろ行きましようか。

そうね。黄熊（ぶう）。

廊下を歩いて行くと図書館があった。

図書館…。とても大変な所に来てしまいましたね…。

うげエ…本ばっかりじゃねーか此処…。俺苦手なんだよな、こういう所…。…何がそんなに大変なんだ？

この学校の図書館は別館としてこの学校の中でも特に広い場所なのです。また、一般の所と違い海外からの本も沢山あります。恐らく全体で十万冊以上はあると思いますわ。

はあつ?!俺英語とか読めねーよクソツタレが!幅広すぎんだろこの図書館!一冊一冊調べるなんてチンタラした作業は御免だぜ、俺は。

いえ。一冊ずつ調べる必要は無いかと。ねえ。黄熊。

カタカタ　　は、はい。お嬢様。こ、こちらに、も、文字が　　カタカタ

入口の扉を閉めるとそのドアにはべったりと文字が書かれていた。その文字は紅い何かで書かれていた。鼻がツンとするような匂いがした。

…薔薇…。

えっ?

薔薇の匂い…。香り過ぎてツンとするけれどこれは薔薇。でも、きつと香水…。生花の匂いでは無いと思います。

…なんだ、こりや。『みつけれ』…はあ?誰だよ、こんなモン書いたの。つーかこういうのって普通血文字とかで書かれてんじゃねーの?薔薇の匂いがする真つ赤な液体で

書くとか、どんな趣味してんだよ…。

これは…。インク？お嬢様。これは先生方が持っている万年筆のためのインクでは…？

！ええ。黄熊。きつとそうよ。これは間違いなく先生方がお持ちになっている万年筆のインクよ。

はあ？なんで万年筆で赤いインクなんだよ？

先生方は採点の時この赤い万年筆を使われますの。普段はノートから薔薇の香りがふんわりと香つてとても素敵なのですが…。

どうやら、この瓶ごと使った様ですね。

あら？これはフランス語かしら…。

薔薇のイラストの印刷された外国語の書かれたビンには赤い液体の入っていたあとがべつたりと付いている…。

うわ、すげエ匂いしてんなーおい。…こんなビン、捨てちまおうぜ。鼻がもげそうだ。おい

!?! 待ちなさいよ！まだなんにも分かってないのに捨てるなんて…。おい

はあ？どっからどう見たって使用済みの空きビンだろう。んなものになんの利用

価値があんだよ、手前じゃあるめエし。

おい

はあ? 私がこの瓶以下だつて言うの? 失礼にも程が a

おい、聞こえてるのか?

ほえ? (黄熊&レオ)

聞こえているのかと聞いている。

はっはいつ?

…お前らは何故ここにいる? 何か目的があるのか? そして…なぜ瓶を取り合い、この女の声を見殺ししている?

いや…。あのお…。それは…。

あの、私達はいつも通りに学校に来たらこうなっていて、この男性は急に閉じ込められたそうです。瓶は香りが強過ぎてこの男性が捨てようとしていました。私の話を通じないのはメイドが捨てるのを止めようとしていて、男性と言い争いになったからです。

私達が返事に困っていた時お嬢様が的確に、簡潔に話を説明して下さいました。

…ただの学生か。ふん、話しかけて損した。

はあ? テメエ、随分と偉そうな態度とるじゃねエかよ、おい。ツラ貸せや。

…お前らに構っている暇はない。…そこをどけ、金髪不良。

狼みてエな眼をした奴には言われたくねエなア。名乗れ。そしたら通してやる。

…断る。名乗った所で何の利益があると言うのだ、俺に。

そういうや否や、レオを突き飛ばす。

…っ！痛てエじゃねエかよ teme エ…。おい、待ちやがれ！

…。

足早にその場から消え去った。

レオさん。ここは我慢して頂けませんでしょうか？ 敵か味方かも分からない相手を刺激するのは危険だと思いますわ。それにまずはこの文字の意味について考えなければならぬと思います。

あの、お嬢様…見ず知らずの相手にあんな事を喋ってしまつて良いのですか？

良くないわ。でも、レオさんがおつしやつたようにあの方の目はまるで狼の様でしたわ。それに、手に何かを握つていましたわ。

あんにやるー…！会つたらただじゃおかねエ！…あ？なんか持つてたア？…言われてみりや、殴られた時、彼奴の手に血が滲んでたな。ざまーみやがれ。

あんたねえ、殴られたは言い過ぎじゃない？ 軽く突き飛ばされただけよ。それに血が滲んでるなんて…何か危険な物でも持つていたかも知れないのよ？ そんな事言つてら

れるなんて全く能天気ねえ。

軽くう？アレのどこが軽くなんだよ？お前のほうがよっぽど脳天気だサイコパスメイド。寝言は寝てから言いやがれ。つーかよ、危険物で手の中に収まるものがあるか？ナイフにせよ銃にせよ、手の中に収まるかっての。

収まるかもしれないじゃない。カミソリの刃とか色々あるじゃない。はっはーん、さてはそういうの知らないのねー？まああんた馬鹿だもんねー（笑）

馬鹿はテメエだよ、サイコパスメイド。いいか？カミソリの刃持つてるやつのは指は多かれ少なかれ必ず傷がついてんだよ。アイツの手に血が滲んだのは、俺を突き飛ばしてから。あとな、カミソリの刃は普通に手よりでけーよ知ったかぶり。

はあ？知ったかぶりい？小さいのも a

しっ！

隠れて下さいっ！

!?

とつさに机の下に潜った。

コツコツ…コツコツ…コツコツ…コツコツ…コツコツ…ガチャツ…コツコツ

…コツコツ…コツコツ…コツコツ…キイイー ガチャン……………

もう出て大丈夫ですわ。



な、何が…。誰かが来たのでしょいか？

…奴だ。

えっ？

## 五章

### お嬢様と一般庶民の違い

「…！あ、いや、何でもない…」

「へっ？」

「はあ？教えなさいよ！勿体ぶらなくてもいいじゃない。」

「るせエツ!!! 気安くホイホイと聞いてくんじゃねエツ!!! 何も知らねエ癖に…!!!」

「…何かあつたんですか？それとも知っている方でしたか？」

「…っ！…言えね。」

「え？」

「…急に怒鳴った事は謝る。…けどよ、いくら口が軽い俺でもこればつかしは言えねエ。」

「…知る必要は、ねエ。」

「…。そうですか。無理に言う必要はありませんわ。それより…。」

ガチャガチャツ

「…閉じ込められてしまいましたわ。」

「…。蹴破るか？」

「……………レオさん。きつとさつききの文字にヒントがあるはずですわ。レオさんに開けて頂いても良いのですが、もしかしたらここでも何か手に入るかもしれない。ここはこの場所の規則に従った方が良いと思いますわ。」

「…かーめんどくせー。大体よオ、こういうのは大抵すげー面倒な仕掛けとかがあつて開かねーパティーンだろ？ だったら素直にドア蹴破つた方が早いだろーが。この手のゲームはやり込んだからわかるつての。」

「ばていーん？」

「今度説明しますから！」

「あんたさつきから現代語使い過ぎよ。ちゃんとお嬢様に分かるように説明しなさいよー。」

「申し訳ありません。何も知らなくて…。」

緑が申し訳ないという感情を最大限込めたかの様な顔をしてレオに謝つた。

「あー…その、なんだ、”パティーン” ってのは、英語の”パターン” から来てる。”パターン” の意味は”場合” ってこつた。…つーか、本気で謝らなくてもいいぞ？ 庶民の俗語だし、緑みてエなお嬢様が知ってる方が驚かれさる。」

「ご丁寧にありがとうございます。」

（ああ。なんであいつなんかがお嬢様のエンジェルスマイルを見てんのよ。さつきから

何度も何度もお嬢様に謝らせて…。)

「おーい、サイコパスメイドく。睨むとスゲエブツサイクになんぞ、テメエの顔。素は結構良いんだから大事にしとけ。」

バツシーンツ！

!?

「なつ、ななな何おお？き、急に何を言い出すかと思えばあー！」

黄熊が顔を真つ赤にしていて、床にはレオが頬を抑えてうずくまっていた。

(ふふ。黄熊つたらお顔がまるで林檎のよう。まるでお兄様にあつた時の窓花様の様だわ…。)

「痛つてー!!!?!!いきなり何すんだよこの暴力女!!!俺は事実を述べただけだろーが!!!」

ドツ

!?

「ふぐつ!!!?!!」

「あ、あああんたはさつきからじ、自分の言ってる事が分かつてるのお?」

さつきよりも顔を真つ赤にした黄熊が体を震わせながらレオの腹にアクリル棒を突き刺した。どうやらレオはレオで鈍感だし、黄熊も黄熊で美人だと言われたことに過剰に反応しているらしい…。

「う」お」お」お」…さ、流石に今のはやりすぎだろ…。もろ脇腹にぶつ刺さったぞ…。…もう言わねエって。それでいいだろ?」

「い、いやその…。別にいやってわけじゃ…。」

「あ?てけじ?」

「な、何でも無いわよっ!」

「…照れてンなら素直に言えばいいのに…(ボソツ)」

!

(ふふ。もしかしてレオさんは黄熊が…。)

どうやらレオの呟きは緑の耳にだけ届いていた様だ…。

「そろそろ本題に戻りましょうか?」

「そ、そうですね。取り乱してしまい申し訳ありません。」

?

「ん?何だ、人の顔ジロジロと見て。何か顔についてるか?」

「あつ、いえその…。申し上げにくいのですが…。」

「ンだよ。ハッキリしろや。ついてンのか?ついてねエのか?」

「あつはは!あんな顔に爪楊枝くっ付いてるわよ?なんで気づかないのよお?」

黄熊がお腹を抑えて笑っている。どうやらいつもの調子を取り戻した様だ。

「……はああああッ?!?!ついさっきまでンなことになって無かったぞ?!?!爪楊枝?!?!爪楊枝つてマジで言ってるのか?!?!」

「……これで見えてみて下さい。」

緑から渡された手鏡で見ると、確かに右頬にぺつとりと爪楊枝がくつついていた。

「確かにおかしいわね……。私が引っぱたいた時はこんなにくつついて無かつたわよ?」

「げつ……。これあのインクでくつついてやがる……。クセエ……。……というか、さっきお前に引っぱたかれるまで俺顔に何か当たって記憶ねエぞ?」

「これ……『つまようじ』って言うんですね……。」

「そこにツツコむかお前?!?!……あー、そうだよ。弁当の割り箸とかについてる極普通のやつだよ。」

「わり……。ぼし?」

「だー!!!割り箸ってのは木製の安物の箸だ!!!コンビニ行かねエのか!!!……って、緑が行く訳ねエのか。あー……。ほんつとに世間知らずだな。」

「申し訳ありません……。」

(コンビニって何の事なのでしょうか?)

「……まさかとは思うがコンビニまで知らねエって言う気じゃねエよな?」

「い、いえ…。確かに知りませんが…。世間知らずで申し訳ありません…。」

「…はー。もういいや。説明する俺がアホらしくなってきた。」

「も、申し訳ありません…。」

（ああああー！お嬢様を泣かせたアー！あいつ気づいてないよお！お嬢様の目元が潤んでるの見えないんかい！コンビニなんてお嬢様が知ってるはずないじゃないのお！フツぎけんなあー！）

「おい、サイコパスメイド。お前ン所のお嬢様の教育はどうなってンだ？世間一般の常識教えてないのか？」

（はああああッ?!何言ってるのよこいつう！失礼にも程があんだろぅがああー！）

「申し訳ありません…。本当にごめんなさい…。あの、本当に、勉強足りなくて…。ごめんなさい…。」

「謝られてもねエ…。…色々知つとけ。ンな知識じゃ俺も喋りくいし。」

（ああああ!?!テメエがお嬢様にあーだこーだ言える立場かよお？フツぎけんなあー！）

「申し訳ありません…。」

「…。あ、やべ、マジで泣かせた？俺泣かせちゃったパティーン？これ完全に俺悪いパティーン？」

「……………つつつつあつたり前でしようがあああああ  
!!!!あんたいい加減にしなさいよねえええ

!!!! さつきからさつきからあー！お嬢様は何も悪くないのにいい！追い討ちばつか掛け  
てえ！悪いのは全ツ部あんたよお！」

「わ、わかったって!! わかったから！その棒振り回すな!! ……あー、すまん。俺も言い  
過ぎた。気にしないでくれ。緑と俺は、お嬢様と一般庶民、つていう壁があんの、忘れ  
ちまつてたよ。」

「ごめんなさい。一般的に生まれて来れなくてごめんなさい…。世間知らずでごめんな  
さい…。ごめんなさい…。ごめんなさい…。ごめんなさい…。ごめんなさい…。」

「お嬢様？大丈夫ですか？しつかりなさって下さい！」

「え、ちよ、ま……おい！しつかりしやがれ!!!」

「ごめんな……」

ドサツ……

……。

「貧血……だけでは無さそうですね…。とりあえず寝かせましょう…。」

黄熊が頭を打つ寸前の所で緑を押さえて、床に寝かせた。テキパキと作業をこなす所  
を見ると、初めての事では無いようだ。

「…何が起こったんだ？此奴、何か発作でも持つてるのか？」

「お嬢様は重い貧血をお持ちなのよ…。それに…。」



「それに？」

「…っ。なんでもないわ。」

お嬢様はきつと今まで耐えていたんだと思う。急にこんな事になって今にも倒れそうだったはずなのに…。」

「…。そーか。まあ、子兎が猛獣の檻に突っ込まれた様な状況だしな。…しかし、ここまですぐ持ったもんだ。」

「ええ。暫くは休んで頂かないといけないから…。少しここの中を探してきて。あとさっきお嬢様がおっしゃっていたんだけど、みつけテの『テ』だけカタカナなのが気になるって。」

「…ん、わかった。…そういやさ、アンタは休まなくて平気なのか？」

！

「…」。私はいいわ。お嬢様に頼ってばかりだったもの。こんな時こそお守りしなければならぬのに…。倒れてしまったのは私の責任でもあるもの…。」

「…」。お前…。」

「…あと、そ、その…、あ、ありがと…。」

顔をうつすらと赤く染めて黄熊が目をそらす。

「…」。これ貸してやる。枕にするなり、掛け布団にするなり好きにしな。」

バサツ、と何か黒い塊を黄熊に投げるレオ。

「これは……?」

「俺の来てた上着。昨日買ったばっかのおニユーだからまだ何も汚れてねエ。」

上着を脱いだレオは、タンクトップだった。

首元にシルバーのネックレスがキラリと光る。

「…そう。ありがと……。」

黄熊は上着を綺麗に畳んで緑の頭の下にひいた。

「本当は足を少し上げられればもつと良いけど、場所も場所だしね…。」

「…何冊か本重ねりやいいんじゃないやねエの?こんな事態だ。一、三冊汚れたって文句言われねエだろ。」

「そうしたいけど、お嬢様は肌も弱くていらっしやるから…。」

「…わーった。アンタ、後ろ向いてろ。こっち見んなよ?」

再び、バサツと何かが投げられる。

「…まさか、これ…」

「もう脱げねエからな。流石にズボン脱ぐわけにやいかねエし。つかズボンを脱ぐ趣味はねエ。」

「…ぶっ!あんた何言ってるのよ?私だってズボンを脱がせる趣味なんて無いわよ。」

「…。やっぱ、威勢のいいアンタの方がアンタらしいよ（ボソツ）」  
「え？」

「ンでもねーよ。俺が探してくっから、アンタは緑の傍に居てやんな。」  
ニカツ、と歯を見せてレオが笑った。

## 六章

### 自販機荒らしの真実

(…。これタンクトップじゃない。)

「言つとくけど汚れてねエからな。ま、想像つくたア思うけど、俺今上半身裸なんでね。見たきやこつち向いて見とけ?」

「みつ見たく無いわよっ! からかうのもいい加減にしなさいよねっ。

あと、折角だけどこれは使えないわ。お嬢様は肌が弱くていらっしやるから。…それとそんな格好でウロウロされる訳にはいかないわ。冬なんだからタンクトップくらいは着たら?」

黄熊がレオに背を向けながら言った。

「おいおいどんだけだよ。…んじやー、遠慮なく着させてもらうか。」

「遠慮なくつて…あんなのでしょ。」

「まあ、一回は貸したモンだし? ここで着替えるし? その辺は俺も弁えてるからさ。よっと。」

「そ、そっ?」

レオが黄熊の隣にすつと立つ。

「な、何よ?」

「いや? 服取りに来たついでに此奴の具合見に来ただけだよ。んー…俺も肌白いけど、此奴は病人レベルだな、おい。」

「ご病気でいらつしやるもの。当たり前だわ。」

「ふーん。病気ねエ…。…よつ。おし、着終わった。」

「なら探してきて。ここ、なんだか密閉されていて良くないわ。酸素不足も貧血の原因になるしね。」

「へいよ。…ま、期待はするなよ? 俺馬鹿だし。」

「そこまで馬鹿ではないと思うけど (ボソリ)」

「…。おう! サンキューな。」

「へっ?」

(ま、まさか聞こえてたの? 聞こえないように呟いたはずなのに…。)

「さて、探すか。」

(聴力も視力も狩猟民族並みって評価受けてっからなー。あれくらいなら余裕というか普通の声並みなんだよ。)

(やつややつぱり聞こえてたみたい…地獄耳かよ? は、恥ずかし…。)



たか？」

・レオよ…。オヤジギャグは寒いのだよ…。

「あん？誰だよテメエ。」

・……………

「ンで黙るんだよテメエ!!!俺はあのサイコパスメイドと違って正常なシリアルキラーなんだ!!!病んでねえんだよ!!!」

・……………

「HA☆NA☆SE!!!黙るンじゃねエ!!!俺をアイツと同じにするなアアアアア!!!」

・……………

「だああああッ?!?!テメエ何笑ってんだゴラア!!不良舐めんじゃねエぞ!!!」

・……………

「…。マジでお前誰なんだ？流石の俺もだんだん怖くなってきたぞ…。」

シーン…

「…もう来るなよ…。頼むから。お化け、駄目、絶対な。」

・……………

「アーアーキコエナイキコエナイ。オレハハニモキコエテナイ。」

「ちよつと、あんたさつきから何やってんの？あんまりもたもたしてるとお嬢様のお体

に良くないんだけど……」

「あ？テメーは黙ってるサイコパスメイド!!」

「はいはい。私にはなんと言おうと勝手だけど、お嬢様だけは助けてよね?」

「……!?!テ、テメエ怒らねエのか?……気持ち悪い……」

「怒りたいけど……。今はお嬢様の命が優先よ。」

「……チツ。……真面目に探すよ、真面目に。」

「ええ。お願い。」

「……」

(ンだよ此奴……。突っかかってこねエなんざ此方の調子が狂うだろうが……)

「……。そうだ。何か手掛かりはあった?」

「……。手首のねエマネキンがあった。その手を探すって事だろーな、アレは。」

ぶつきらぼうにレオが答えを返す。

「そう……。みつけテのテはハンドの『て』って言う事なのね。ブルツ　寒いわー。オヤ

ジギヤグって所かしら。」

「……!?!……マネキンの手なんざどこに落ちてんだか……」

(此奴……。俺と同じ事を?偶然にしちや出来すぎてねエか?)

「さあ?それを探すのがあんたの仕事よ。」



「…お、おう…」

少年探索中

10分後 「ねえな…。」

15分後 「うーん…。」

17分後 「だー!!! ねえよんなモン! 俺が分かるわ

けねえだろうが!」

「…。無いの?」

「ねエ!!! まつつつたたくもつて見つからねエンだよ!!! おい、お前探してこいよ!!! 此奴の状態になんかあったら叫ぶからよ!!!」

「…でも…。」

「でも何もあるか!!! 俺はもうお手上げだし、大体此処の酸素が薄くなるって言つたのはお前だろーが!!! テメエのお嬢様なら、テメエの力で此処の謎解決してみな!!!」

「……分かったわよ。お嬢様には絶対対何もしないでよっ? お願いよ? 何かあったら…っ…。」

そう言いながら黄熊は手を探しに向かった。

「…俺に初対面の女をどうこうする趣味はねエよ…」

くメイド探索中く

5分後 「…?」

7分後 「…( )は?」

10分後 「…開かない…」

「奥のカウンターに箱があつたわ。でも開かないの。鍵がかかっているみたい。」

「ぶつ壊すか?」

「あんだねえ。なんでも壊せばいいって訳じゃ無いのよ?お嬢様にも言われたことじゃない。」

ふう、とため息をつきながら黄熊は言った。

「へいへい。…んじやー、爪楊枝でピッキングするか?」

「ええ。お願い。あんだピッキングなんて出来んのね…。お嬢様には言わないでよ?多分ご存知無いから。」

「ま、これはある意味犯罪用語だし、知らなくていいんじやね?…おっし、自動販売機開

けで鍛えたピッキング技術、とくと見よ!!」

「まさかの自販機荒らし!? あんたはそんな事ばつかよねえ。」

「へっへっへ…前にこの辺りで自販機荒らし多発したろ? あれぜーんぶ俺だから。こんな簡単なものなら御茶の子さいさい♪」

「あんたなのお? 私も被害者よお? お使い行つてて自販機であつたかいの買おうとしたら自販機壊れてるんだもの。なんてことしてくれたのよ! おかげで百円無駄にしちやつたのよ!」

「ぶはっ!!? マジで言つてンのお前?! うわーお疲れ様じゃねーか!!! マジ乙〜!!!」

「ほんとお疲れ様よ! おかげでぶるぶる震えながら帰つたんだからね! あーあ私の百円があ…。」

「百円なんざ自販の下探せばいくらでも出てくんだろーが。百円ごときでその反応とかお前何処の守銭奴だよ。」

「あつたりまえよ! 旦那様から大切なお金を預かつてるんだからなるべく安く済ませなきゃいけないわよ! 言つとくけどこころ辺のスーパーの裏タイムセールの間時間帯なら全部把握してるわよ。」

「うわ何処の節約主婦だよ此奴。お前ほんとに10代か? 実は小柄なおばさんとか言うんじゃねエよな?」

ドスッ！

「うぐつ!!？」

「ニコニコ 言つとくけどあんまり年齢の事で乙女をからかうもんじゃ無いわよ？」

ニコニコ」

「テ、テメエ…女だからつて調子に乗つて殴つてるンじゃねエぞ…!!この年齢不詳女が…!!」

「はあ？さつきあんた10代つて言つたじゃない！この年でも節約して健気に生きてんの！」

「見た目的にそう見えたンだよ!!!健気？テメエみてえなな奴はぜつてー力で物言わせて生きてンだろ!!!おー、怖い怖い。」

「ふんっ。失礼ね。あのお屋敷の中で力でものを言わせる所なんて無いわよ。とりあえず早くピッキングしちやつてちょうだい。」

「誰かさんのどーでもいい話のせいで進んでないンですがねー？」

「タラタラ だ、誰ようねー？ タラタラ」

「なんか俺のすぐ側でピッキングがどうのこうのつて騒いでた人がいたようなく？」

「ダラダラ さ、さあ？早くやつちやつてくれる？」

ダラダラ」

「冷汗ダラダラかいてたり〜？」

「ダバー　　お、終わったあ？　　ダバー」

「ん〜？もうちよつとかな〜？百円一枚無駄にした誰かさん〜」

「ウルウル　　ど、どう？ひ、百円なんて全然気にしてないんだからあ…。  
ウルウ  
ル」

「…開いたぞー…」

（やべ、此奴泣きやがったよ。からかいすぎたか？）

「キラキラ　　ほ、ほんとお？　　キラキラ」

（うわ此奴開いたって言った瞬間泣き止みやがった。あえて嘘ついてやる。）

「…嘘だ。開いてない。」

「キラキキ…　　へ？あつ、とつ、えつ？　　ズーン」

（素なのか？天然なのか？素直なのか？…いや面白いよ？面白いけどさ。…あからさまにガツカリされるとなア…）

「…嘘だ、嘘。本気で開いてるよ。ほれ、開けてみる。」

「ズー…　　へっ？あつほんとだあ。スゴおーい！レオスゴおーい！  
キラキ

ラ」

！



## 七章

ほけんでもしんぶんでもないよ！

「うわああ…はっ!?」

「…おい、正気に戻ったかー？俺に抱きつくなんざ酔狂様な事してっけどよ。」

「きゅ……」

「きゅー」

「きゃあああああ!!!」

バツシーンツツ!!!

「痛ツツツツてーーー!!!?」

「あ、あんたは、ななななあーにをし、しししてるのよおー!?この変態があああああ!!!」

「はああああツ?!?テメエが抱きついてきたんだろうがこの馬鹿メイド!!!」

「は、はああああツ?!?私があんたなんか抱き着く分けないじゃないっ!とぼけんのも

いい加減にしなさいよねっっ!」

「俺に初対面の女に手を出す趣味はねエ!!!…それに、誰が好き好んでこんなサイコパス

の暴力女なんか抱き締めるか!!!」

「はああああッ?!?!何よ?じゃああんたは良く知り合ってから殺すわけえ?ふーん…。良  
く知り合って安心させるわけえ?まあ、そんな事どうでもいいわっ!私を抱きしめてた  
事実は変わらないのよっ!?!あー、穢らわしいっ!」

「だ・れ・が!!抱き締めたんだよ!!?大体いつ俺がお前に触ろうとしたよ!!?お前に触れるな  
んぞ考えた事もねエわ!!?!つか俺の手が穢れるね!!!」

「はあッ?!?!さつきいつの間にか抱きしめてたじゃないのお!!?!ううっ 初めてだったの  
に…。まさか始めてがこんな奴なんてっ!?!ああッ!!穢らわしいわっ!!!」

「ふざけんじゃねエよこの被害妄想女!!?!ついさつきの事も覚えてないのかよ!!?!俺はつい  
さつきまでピッキングしてお前に背中向けてたんだよばああか!!!」

「はあッ?そんなん知らないわよっ!?!とにかくどう誤魔化そうとしたってあんたのした  
事は消えないのよっ!?!どあああほ!!!」

「ああ?テメエの都合が悪けりや全部俺のせいかアッ?!?!いい加減にしろやこの頭クルク  
ルパーやろうがよオッ!!!」

▪ おい、お前ら。目的を忘れるな。騒いだせいで余計に酸素減ったんじゃないか?

「…るセツ!!?!?!…ったく…。あー、はいはい分かりましたよ。俺のせいなんでしょ、俺の。  
全く…。」



?

「何俺の顔見てンだよ。おら、さつさと金庫の中身見んぞ。…あ、一、空気が薄いつたらありやしねエ。」

「手、だわ…。」

「嵌めりやいいのかッ！うらッ！！」

グザッ！

…ガチャッ！

「なんか凄いエグい音がした…。」

「マネキンに一々気を使う必要なんざねエだろが。んで？これで鍵空いたのか？」

ガチ…ガチャッ！

「ええ。開いたみたい。」

「ふーん。とりあえず窒息死は免れたって訳か。…後は…」

レオがチラリと緑の方を見る。

「こいつが目を覚ますの待つだけか。」

酸素がかなり薄くなっていたこともあり、緑の肌は死人と見分けがつかないほど青白くなっていた。

「…。まずいわ。」

「何が?……おー、死んでんの………」

「死んでないっ!」

「へいへい。でも今にも死にそうじゃね? 緑。」

「そう。だから……。別の場所に移動しましょう。」

「別の場所オ? 何処に行くつもりだよ。つーかアテあんのか?」

「…家庭科室。あそこなら布があるわ。」

「空いてンのかよ……。まあ、そこに行くってンなら俺はついてくけど。緑貸せ。俺が運んでやる。」

「…。分かったわ。どうか丁寧に……。」

「よつと。」

レオが緑を荷物の様に肩に担ぐ。

「……………」

「……………てい n」

「無理不可能諦めろ。」

「…………。分かった。」

「落とさなきゃいいンだよ落とさなきゃ。此奴が目を覚まして、ここから脱出する。終わりよければ全て良し、だ。」

「行きましょう…。」

「あいよ。俺は道知らねエから案内頼ま。」

「…ついてきて。」

く少女運搬中く

カツ　カツ　カツ　…

「…よ。」

「へー、結構広いモンだな。ドア開くか？」

カチャッ

「開いてるわ。」

「…お、好都合。さっさと入るぞさっさと。」

「ここで待ってて。お嬢様は降ろさないでね。」

「…めんど。降ろしたって変わんねエだろ。」

「ちよつとだから…。」

くメイド探索中く

ガサゴソガサゴソ

「！あつた。」

くメイド準備中く

キィー……ガタガタ……

「もう良いわ。こつちに来て。」

「おつす。……ここに降ろしやいいの?」

「そう。この布の上。慎重にね。」

「ほいつ。」

トサツ

レオは雑に緑を置いた。ほとんど投げられたに近かったが、緑の体からはとても軽い音がした。

「うわ、効果音軽つ!普通、トサツとかするモンじゃねエの?」

「う、ううん……」

「お嬢様っ!?ああ良かった!このまま目を覚まされないのかと思い、とても心配しました!」

「ぶ、黄熊?こ、ここは……?」

「家庭科室。このサイコパスメイドがここに運べつつつて俺が緑をここまで運んだ。:

おー、顔が白い事。」

「そうなんですか……。ありがとうございます。黄熊もありがとうございます……。」

「いえいえ、そんな!私はお嬢様に仕える者として当たり前前的事をただけです。そん

な事より、もう少し横になってお休みになって下さい。顔色がすぐれませんか？」

「だな。…今、無理して動きやがったら殺しちゃおうぞ？」

「へっ？」

「は、はい…？」

「……………あ、有難く休ませて頂きます…。」

「おう。…んで？ここで何すんの？」

「まだ分からないわよ…。」

「はあ？…ノープランとかふざけてんのか？」

「はあっ？プラン何である訳無いじゃない！つてか逆にあつたら驚きよ？」

「俺は馬鹿なんでね。指示受けりや何かしてもいいけど、それ以外で自分から動くなんてぶっ壊すか殺すかのどっちかだよ。…まー、今の状況なら探索つてのが定石だろうけど。」

「ふう…。また探索…。」

「窓ガラス割りてエ〜」

「は、はあ？あ、あんた何言つてんのよ？状況考えなさいよ？」

「…何もぶっ壊せてねエからストレス溜まってんだよ。あー、何でもいいからぶっ壊してエ。…ドア壊すか。」

「やめなさいよっ!? 何か壊してヒント失ったら…。ってかお嬢様お休みになってるんだからねっ!」

「おっ!? とそこまでだなあ。」

「!!??」

「おいおい、そこまでおどろかなくてもいいだろう?」

「…新聞なら間に合つてつけど?」

「おいおい、ぼくはしんぶんのかんゆうなんかじやないよお?」

「んじや、保険は入る気ないんで。」

?

「ええー、おねがいますよお。いまならとくてんでせんざいととれつとペーぱーがつきますよお……つてちがうだろうっ!? ほけんでもしんぶんでもないよお。」

「…てか何で全部平仮名台詞なんだ? 漢字と片仮名書けねエの?」

「……………まあそれはおいといてえー。きみもぼくとのんきにはなしてるばあいじやないだろう?」

「…ねえ」

「…何の話だ。俺の背後の奴らに手を出すつてンなら殺すぞ、テメエを。」

「ああ。それならしんぱいはいらぬよ。なんだつてそのかたは……さまだからね。ぼ

くなんかがてをだせるおかたじゃないよ。」

「…。それなら、何で俺の前に居やがる。…俺を殺せとでも?」

「…ねえ」

「いいや、それもちがうよ。ぼくはきみたちにてだしはいつさいしない。それはやくそくできる。そのかわりぼくのじょうけんをのんでもらう。いままでのへやはだれもいなかったみたいだけど、こんかいはこのへやのかぎをもっているのはぼくだけだからね。」

「…は?…なら、テメエを殺せばその鍵が手に入りそうだなア?」

「んー。そのてもあるけどやめたほうがいいよ。きみがしりあるきらーなのはしつてる。でも、ぼくみたいながきをころすのはしゅみじゃないだろ?それに、あのひとがどうなつてもいいの?」

「…!…はつ、テメエ、俺の足元見ようつてのか。…歳上に対して随分と生意気なガキだなあ、ん?」

「きにさわつた?ならあやまるよ?でもね、これはきみのためだとおもうよ?ここであのひとのことをいつちやつていいの?」

「…………。クソツタレ。俺は明日死のうが今死のうが関係ねエのに…:…わーつたよ。憤懣遣る瀬無いが、テメエの”お遊び”に付きあつてやる。このはなたれ生意気小僧が

「…!」

!?

「ねえ…あんた…。」

「ンだよ。」

「さつきから…誰と話してるの?」



## 八章

## カヌレの作り方

「ガキンチヨ。」

「へっ?」

「だから、ガキ。生意気な糞ガキだ。」

「…私には見えないわよ?」

「…テメエ馬鹿か?俺の背中の方から見て見える訳がねエだろうが。」

!

「今は居ねエな……。」

「ぼくはここだよおー。」

「!?テメエ、どんな芸使ってんな所に…!?」

「れ、冷蔵庫?」

その少年は冷蔵庫の中にピッタリと収まっていた。

「…お前、頭狂ってンのか?何をどう考えたら其処に入ろうと思うんだよ。」

「んー?なんかおいしそうなものはいってないかなーっておもってさー。いやー、さす

がおじようさまがつこうなだけあるわー。ごうかごうか。」

「…。いや、何処のこそ泥だよ。何処の無銭飲食者だよ。」

「あんたは人の事言えないでしょ。自販機荒らし。」

「それとこれとは話が別だろうが!!それは前科だつての!!此奴は現行犯なんだよ!!」

「あーもう。ちわけんかはよしてよお。かぎいらぬのお?」

「痴話喧嘩じゃねエわ!!!誰がこんなサイコパスメイドと付き合うか!!!つーか鍵渡すつもりなのかよ!!」

「? うん。」

「……………え? いやいやいや、冗談だよな?」

「ううん。ほんとお。」

「……………。ホントだな?」

「うん。でもじようけんはのんでももらうよお。」

「…お、おー…」

「わお。」

その少年はとても幼い顔立ちをしていた。レオも充分に童顔だが、この少年はランドセルを背負っても違和感が無い程だった。オレンジに近いブラウンの髪をふわふわと揺らして笑っていた。

「わお、つて…何をんな驚いてんだ。…そんなに意外か？」

「いやあ、めいどさんがいるなあつて。」

「……………はっ！」

な、何？誰よあんた。」

「ぼくう？ぼくはねーカリナつていうんだー。」

「…あー、此奴に驚いたのな。そりや納得だ。」

「ちよつ、それはどう言う意味よ？」

「さアね。自分で考えな、サイコパスメイド。」

「なつ、あんも…。」

「はいはいそこまでー。そろそろはじめてもらおうよお！」

「…。始めんのは構わねエが、何すんだ？」

「んつとねー。たぶんそのめいどさんか…さましかできないとおもうよお？」

「なんだそりや。何するつもりなんだよ。」

「おかしをつくつてほしいの！」

満面の笑みでカリナは言った。

「……………はっ？お菓子？菓子作れつての？」

「うん！」

「は、はあ……。まあここでなら大抵のものは作れるけど……」

「……お、其処はやつぱり腐つてもメイドって訳か。頑張れ。」

「は、はあつ？腐つてなんかいないわよっ！……でも……」

「でも？……まさか、ダークマターしか作れねエのか？」

「ち、違うわよ！私も作れることは作れるけど場所が……。それにお菓子ならお嬢様の方がお上手でいらつしやるわ。」

「ふーん……。じゃあ病人駆り立てて作らせんのか？テメエ。」

「い、いや、そういうわけでは……」

「私がやりますわ。」

！

「お、お嬢様？どうかご無理はなさらずに……。寝ていて下さいませ。」

「そんな訳には行かないわ。私この家庭科室には慣れていきますもの。私に出来ることがあるのなら、喜んでやらせて頂きますわ。」

「……。無理はすんなよ？今、緑に死なれたら困るんだ……」

「いえ。大丈夫です。ありがとうございます。」

「わお。……さまざまからつくつていただけるなんて！ありがとうございます！」

!?

緑の額に薄く汗が滲んでいるのはレオにだけ見えていた。

「お嬢様……。どうかご無理はなさらずに。申し訳ありません。私のせいで……」

「良いのよ黄熊。今は私に出来ることをやらせて頂戴。お二人が休ませて下さったから良くなって来たのよ。黄熊が謝る事は何一つ無いわ。」

「……」

（何が良くなっただよ。額に汗滲んでるじゃねエか。クソツ、無理なんかすんなって叫びてエけど、俺じゃあ何も出来ねエ……!!…頼むから、これ以上具合が悪くなることだけはやめてくれ……!）

「何を作れば良いのでしょうか?」

「うーん、そうだなあ、じゃあ……かぬれで!」

「分かりましたわ。」

「…カヌレって何だ? (ボソツ)」

「フランスの伝統菓子よ。(ボソツ)」

「そーなのかー。あ、言つとくが何処かのパクリじゃないぞ?」  
?

「今はそんな事言ってる場合じゃないでしょ。」

そんな事を言っている内にも緑は、生地をほほほほ完成させていた。部屋の中にバニ

ラビーンズの香りが充満する。

「本当ならここで生地を寝かせなければいけません、時間が無いのでこのまま焼いてしまいますね。食感が弱くなってしまいかも知れませんが…。」

「わかったー。だいじょうぶです。」

型に生地を入れる緑の手は僅かに震えていた。

「…」

（手、震えてやがる…。めちやくちや危ういじゃねエかよ!!!…つたく、あのガキ、こんな事をわかっててやったのか?…わかってたら、後で殺してやる…）

「後は45分焼くだけです。」

「やったあ!じゃあまつてるあいだはすきにしておいてかまいませんよお?」

「…なら休んどけ。病み上がりの奴に重労働なんざ死亡フラグ建設だからな。」

「では、そうさせて頂きますわ。でも、10分経ったら声をかけて頂けますか?」

「かしこまりました。10分後ですね。」

「ええ。お願い。」

「…」

（10分、か…。そんな時間で具合が良くなるかつつの。）

く少女休憩中く

……

10分後

「お嬢様、10分後ですよ。」

「ありがとうございます。」

それからは何度も温度を調整したりして35分が経った。

「出来ましたわ。」

カヌレ型から中身を取り出して、皿に並べる。

「わーい！ありがとうございます！ほくかぬれだいですきなんだあー！いただきまーす。」

緑が焼き上げたとても美味そうなカヌレをカリナは幸せそうに頬張っている。

「あー、おいしかったあ。じゃあかきをあげるね。」

「…」

「はい。それじゃ、じゃあね。」

左手をヒラヒラと振って立ち去ろうとした。

!?

「あんだ…、右手は？」

立ち上がったカリナは白のシャツにベージュのベストを着ていて、星や月の飾りが付

いたブローチを付けていた。しかし、そのシャツの右腕の方は風に揺れていた。肩の当たりから血の跡が付いていて、袖の先からは血が滴っていた。

「? ああ。とられちゃったよ。それじゃ。」

髪の毛をふわふわと揺らして無邪気に笑いながら立ち去って行った。

「:ちよつと待てよ!!? テメエ、んな簡単な条件で鍵渡すつもりだったのかよ!!?」

「? うん。そうだよ。」

「はああああッ!!? 何考えてんだよ糞ガキ!!! テメエの腹満たす為だけとか何処のお坊ちゃんだったの!!!」

「まあ、かぎももらえたんだからいいじゃないか。きみたちがしるひつようはないよお。」

「あ” あ” つ!!!? テメエ、やつぱ一編俺に殺される!!! 死んでこい!!!」

「やーだーよ。じゃあね。」

そう言っていないなくなつてしまった。

「待ーちーやーがーれー!!! このガキ!!!」

「もう行つちやつたわよ。」

「ふざけんなアアアアア!!!」

「落ち着いてください。レオさん。」

「餅なんか付いてられっか!!!」



「餅、ですか…?」

「テメエが言ったんだろが!? 餅付けて!!」

「お、落ちていて下さいって言ったのですが…。」

「落ち着け!?! 落ち着けるかっての!?!?」

「ちよつと、よしなさいよ! お嬢様をこれ以上困らせないで頂戴っ!」

「…!…ちつ。わーつたよ。」

「…。」

「…んじやー、これは何処の鍵なんだ?」

「ドアの鍵じゃないの?」

「そんならい俺にだってわかるわ!!!」

「じゃあ何で聞くのよ?」

「何・処・の! 教室なのか部屋なのかって聞いてんだよ俺は!」

「はあつ? 今家庭科室に居るんだからここに決まってるじゃないの。」

「黄熊、これは…職員室の鍵よ。それに、ここの鍵はカリナ様が開けて行かれたじゃないの。」

「…ほー。やつぱお前の言葉よりも緑の言葉の方が信用できるな、知ったかぶりさん。」

「はあつ? ふざけないでよ。い、今のはたまたま間違えただ、だけよ?」

「めちやくちや動揺してンじゃねエか。強情張つて認めねエなんざ、素直じやないねエ。俺は素直な奴の方がすきだぜ？」

「は、はあ？素直じや無くて結構よ。誰があんたなんかにか好かれないと思うわけ？」

「シア？俺、こう見えて恋愛経験はそれなりにあんだよ。結構モチつからなく、二股も三股もした事あるぜ？」

「ふ、ふたまた？」

「同時に二人の奴と付き合うつてことだ。いやあ、バレた時は修羅場だったぜ？やれ、私の方が愛されてるだの、私の方がデートの回数が多いだの……モテる男は辛いねエ。」

「……」  
 ☆。。。\*。。☆。。。\*。。☆。。。\*。。☆。。。\*。。☆

おまけ　　く黄熊さんのぼやきく

「全くあいつは……。お嬢様の知らない事ばかり……。後二股、三股何て。知らなかったわ。何なのよ童顔の癖に。それに沢山付き合えば偉いってもんじや無いのよ？はあ、何かしらこの胸がモヤモヤする感じは……」

「ってわ、私は何を思ってるのよ？あ、あんな奴の事なんて……」

「何一人で頭ぶつ叩いてんだよ。ンな馬鹿になりてエの？」

「な、何でも無いわよっ！黙れ馬鹿男っ！」



## 九章

### 緑お嬢様はやっぱり乙女

「と、とりあえず行くわよ？」

「いやあ、あの時なんか……なんだ、もう行くのか？つまんねエの。」

「行くもんは行くのよ！」

「何かツカしてンだよ。嫉妬か？見苦s……」

「うるさいっ！」

「へい、へい。行きやいいンですね、行きや。」

（移動中）

（何だったのかしら？あの夢は？）

☆.:.:\*.:. ☆.:.:\*.:. ☆.:.:\*.:. ☆.:.:\*.:. ☆.:.:\*.:. ☆.:.:\*.:.

緑は寝ている間夢を見た。まだ9歳位の少女が涙を流しながら体を引きずっている所を。

「いや、嫌ああああああ！」

そこへ7歳位の優雅なネグリジエを着た少女が現れた。肌は白く、長い黒髪をリボン



恐ろしいとは思っていても、どうしても思い出してしまふ。

(あの女の子…見た事あるような…。)

「何ボーツとしてんだ。熱でもあンのか？」

！

「い、いえ。大丈夫ですわ。」

「無理はすんなよ？何だったら俺が背負ってやるからよ。」

「えっ？」

「ちよつと。内緒にしなさいよ！(ボソツ)」

「…まあ、アレだ。緑一人担いだ所で、鉛筆一本持つのと変わらねェんだ。馬鹿力だけ

なら自信あつからよー！」

「ちよつ、馬鹿っ！あんたがおぶっていたのがバレてしまうじゃないの!？」

「わ、私はおぶって頂いていたのですか？」

事実を知るなり緑の頬は真っ赤になっていた。

「も、申し…訳ありません…わ、わ、私が倒れたばかりに…お、重かった…で、ですよねっ

…」

赤面しながら頭を抱えてうずくまっている。

(お嬢様…。照れるお姿がまるで姫りんごのよう…。)

「おー、真っ赤真っ赤！やつぱ女はこうじゃなくちやあな！だいじょーぶだいじょーぶ！鉛筆持つのと変わらねえからよ！」

「あ…、ああああ…。わ、…た…くし…と…した…事…が…」。

レオが余計な事を言つたせいで、緑の顔は林檎以上に真っ赤だった。今にも『ボンツ』と音を立てて爆発しそうな程だった。

「うわめっちゃいいわー、この反応！まさにお嬢様！って感じで！緑のそーいう所、俺結構好み♪（獲物的な意味で）」

ぷしゅー！

!?

ドツ！

「グフおあああ！」

「あ、あんたアア、い、いい加減にしなさいよねえ？ふ、ふざけんなアアアア！お嬢様に触れやがつてえ！」

「いだだだ…別にいいだろう？頭撫でる位。…つたく、お前はもう少しお淑やかにした方がいいぞ？サイコパスメイド。俺の中のお前に対する好感度落ちまうぜ？」

「うるさいっつ！てを、手を離せえええ！いい加減にしろお！お前がいままで何してたか知らないけど、これ以上お嬢様を侮辱したら…」

ザシユツ!

「ウグオ!」

「ご……ろ……す……っ!」

「ゲホゲホ　　て、テメエマジで殺すつもりがよっ!?!俺はシリアルキラーであつて殺される側じゃねエ!?!殺す側なんだよサイコパスメイド!?!」

「うるっさいっ!離れろっ!離れろっ!」

「ぶ、黄熊……。落ち着いて……。わ、私が悪いのですわ……。わた、くしが……。倒れた……。から……。」

未だに顔を真っ赤にして、緑が言った。

(ああ。お嬢様……リアル天使……。何てお優しい……。)

「何ニヤけながら怒ってんだよ気持ち悪い!?!どこの妄想癖持ちだ!?!」

「うるっさいっ!お嬢様のお優しさがわからないのっ?許して下さったんだから大人しくしろっ!この変態っ!」

「はああああッ!!ちよつと触っただけで変態扱いとかテメエの頭は腐つてんのか!?!え”っ!?!」

「お嬢様はあんたが付き合つてた様な下品な女じゃ無いのよっ!しかもちよつとつて言うなあア!旦那様に見つかったらあんたこの世にいないわよお?」



「下品?? テメエが言えんのかよ テメエがよ!!! 女のクセして散々暴力振るう野蛮なやつが!!!」

「しつ…静かに…なさつて…下さい…」

「あ”っ!?!…おいおい、何つー殺気だ。背中がゾクゾクしちまうじゃねエか?」

後ろを振り向くとそこに居たのは緑では無かった。

「…へえ。俺に銃向けるたア、中々肝座つてンじゃねエかよ、テムエ。…名乗れ。」

「わたしい? あらあ、こういう時は男性から名乗るもんじゃ無いのお? まあ、知ってるけどね。レオ君。」

「…はっ?…ンで知つてンだよテムエ。ストーカーか?」

「あらあ、まあ、その内分かるわよ。」

「…。お前、名乗りやがれ。」

「はあ…。本当に忘れちゃってるのね。私は桜舞（さくま）よ?」

桜舞と名乗ったその女性は身長はレオより5センチ程低く、髪の毛は明るい茶髪をしていた。服装は薄ピンクのシャツに紺色のブレザー、鎖骨の辺りまで軽く波打つ髪の毛はハーフアップにされて、蝶や花卉の飾りが付いたバレツタで留めていた。

「桜舞…?…待てよ、どっかで聞いたことあつた気が…」

「思い出して来た?」

「いや…、やっぱり分からん。」

「はあ…、まあ、思い出せないなら仕方無いわ。」

「んー…。なんかお前のこと見た事ある気がすんだよなア…。」

「とりあえず…。この銃外して欲しい?」

「何当たり前の事聞いてんだ。俺はシリアルキラーであつて殺す側なんだよ(二回目)」

・二回目だな…・

「…(無視)」

「当たり前…なの?」

「ああ? 銃向けられて気分いい奴なんざ居ねエだろ? 中にはそーいう奴も居るかもしんねエけど、俺はマゾじゃねエ。普通のシリアルキラーだ。」

「そう…。珍しい事言うのね。」

「珍しい…? 何を言いやがる。テメエ、俺がいつもこんなじゃねエって言いてエのか?」

「違うわよ。あなたは前からそうよ。でも…」

!?

桜舞は今まで閉じていた瞳を開いた。

「そうじゃない人の方が多いのよ?」

桜舞の瞳は綺麗な空色だった。しかし

「あ、あなた……左眼が……」

左眼の中心が桃色でハートになっていた。

「気付くの早いわね……」

「……ふうん、テメエは左眼がおかしいのか。つーか何だ、俺の銃向けられたリアクションが少数派つてのは。」

「おかしい訳じゃ無いわよ。取られちゃったのよ。」

「取られた、ねエ……。あのガキの右腕も取られたつつつてたかなー。グロいのが多い事だ。」

「……。皆私を見たら殺してつて言うのにな。あなたは本当に珍しいわ。皆お金を払ったり、物を渡したりしてまで私のところに頼みに来るのに。私の方から銃を向けて喜ばなかった人はあなたとあの人だけよ?」

「……生憎、俺は殺したい衝動は持ち合わせても、殺されたい衝動は持ち合わせてないでね。金や物渡してまでテメエに殺されたがる奴らの気なんざ到底理解できねエわ。」

「……そうよね。やつぱりそういう人よね!」

「何嬉しそうにニヤついてやがんだ気持ち悪い。殺すぞ?」

「あら、はにかんだのよ。」

「はにかむう？ンなお上品な仕草には全く見えねエよ、オツドアイ野郎。」

ポロツ

!?

「っ酷い…酷いわ…。好きでこうなった訳じゃ無いのに…。」

カラン

音を立ててレオの背中から銃が外れた。気づくと桜舞は目から雫を流していた。とても綺麗な桜色の透き通った雫だった。

「お、おい、泣くな！悪かったって、言い過ぎたよ!!」

ポロツ

ポロツ

「ピンク色の涙？」

「あー、もう、泣くな！泣きやめっての!!!」

桜舞の流した雫は次第に集まって行った。

「涙が…。」

そして、ある物に変わった。

## 十章

俺は俺じゃ無くなってる気がする

「涙が…。」

桜舞の涙は透き通ったピンク色で、磁石のように集まっていた。

「か、鍵？」

「…！おいおい、どんなマジックだよ…!？」

「……………フ…。…フフ…。」

「な、何笑ってんだよ気持ち悪い!!!」

「…ミ…ミツシヨン…ク…クリア…。」

「…ミツシヨンクリア？何言って…。」

「いるのよね!?!いるんでしょ？聞こえてる？見えてる？…様は…無事にクリアなされたわよ!?!」

「…！……………」

「あの…。」

「！……………様…。」

桜舞は膝を床について頭を下げた。

「よくご無事で…。このままお進み下さい。何処の鍵とは言えませんが、きつとお分かりになるはずです。あと、これ…。」

！

桜舞はネックレスを差し出した。先にはピンク色の硝子細工がついている。中には薄く光る石の様なものが入っている。

「きつと…様をお守りするはずです。私は訳あつて行けません、…様に誓った忠誠は一生です。」

(?どこかで見たことがあるような…。忠誠?何の事かしら…。さつきから座り込んで頭を下げてしまつて…)。

「あ、ありがとうございます…。」

「……。鍵、手に入ったならさつきと行くぞ。」

「あ、はい。」

「……。」

「お嬢様…何の鍵だかお分かりになりますか?」

「これ?これは…理科室の鍵だわ。」

桜舞の涙から出来た鍵は色は違えど、理科室の鍵に間違いなかった。

「理科室の鍵、ねエ…。今度はゾンビとか？」

！

「ガグガク　　そ、そんな事い、言わないでよ…ゾ、ゾンビってあんた…　　ガグガク」

(震えすぎよ黄熊…。)

「プツ！ビビってんのか!?ウケるわ〜」

「なっ!?ビビって無いわよっ!うっさいっ!」

「ビビってるくせにー。まあ、なんか出たら俺が守ってやるからそこは大丈夫だけどな  
〜」

「ななっつつ!?ま、守る?な、何を言ってるっのっよっ!?」

ドスっ

「ウグオツ!」

黄色熊が顔を真っ赤にしてアクリル棒を突き刺していた。

(お約束ね…。)

・もはや茶番だな…・

「…はっ!・テメエは俺に守られなくても生きていけそうだよなあ、暴力女。俺が守るのは緑だけで充分そうだな!!!」

！





「……………」

(頭がクラクラする…。)

!

「お嬢様!?!お顔が真っ青です…。」

今までも白だった顔が前以上に白くなり、青くなっている。

「…プールみてエな匂いだな……………」

「え、塩素……………」

「お、お嬢様?お顔が……………」

緑は黄熊に支えられてやっと立っている。

「ちっ。この中のやつに止めろつつつてくる。」

「お願い……………」

「…(ガチャ)」

!

今までの匂いが急に消えた。

「鉄?」

鉄の様な重い匂いが充満している。

「…血みてエだな……………」

「来たか。」

「！テメエはあん時の!!!」

「昔のことは関係ない。それよりお前は今の事を気にしないのか？扉の前で待っているのでは無いか？」

「……クソ、足元見やがって……!!!」

「お前はどうするのだ？いや、どうしたいのだ？」

「どうしたい？……ンなもん、緑の奴の具合を……ん？」

「なんだ？迷いがあるのか？」

（俺はここから出たいだけじゃなかったのか？成り行きであいつらと行動を共にしているだけで、そこになにか特別な義理があるのか？……必ずしも、あいつらを助ける必要性何て、ねエンじゃ？……俺は、何をこんな……）

「どうした？瞳孔がさつきよりも開いているぞ？己に正直になったらどうだ？」

「……るせエ！今の俺は俺じゃ無くなってんだよ!!!」

「ふん、まあ、良い。ここから出たいか？それとも……を助けるか？」

まあ、お前にとつて……はここを出るのに必要かもしれんがな。」

「つ!?……そうか、俺は、俺の立場は、奪う……」

（クソ、なんで今更コレを思い出したんだ!! 忘れたまんまでいれば、忘れたままでもいられ

れば、俺が”俺”になる事も……!!!)

「どうするのか？言っておくが、今すぐにも塩素を止めることは出来るぞ。お前が一言止めろと言えばな。」

(…。自分勝手と言われようが、自己中と罵られようが、俺は……)

「…止めろ。今すぐに。」

「ほう。」

ガチャ

緑が黄熊に支えられて入ってきた。

!?

緑が信じられないという顔をしている。

「…此奴が塩素を出してた。そして止めたのも此奴だ。」

「どうしたの？あんたまで顔が青いわよ？」

「……に……逃げて……下さい！」

!?

バタンツ

「そういう訳にはいかない。」

「…。捕まえるつもりか？」

「今から質問に答えて貰う。答えるのは…だけだ。他の人間は話すな。」

「…先に言っとくが、質問以外何もするなよ。傷なんてつけた瞬間、テメエの首が飛ぶ。」  
「その点は問題無い。その召使いがいても構わん。しかしお前は隣の部屋で待つていろ。鍵は開いている。」

「…それも”規則”か？」

「ああ。俺の所の規則だ。」

「…なら、仕方ねエな。おい、サイコパスメイド。」

「何？」

「俺はここに居られねエ。だから、何かあっても俺は何も出来ねエんだ。……テメエ一人で守れよ、此奴の事は。」

「分かってるわ。お嬢様の事は命に変えても守る。」

「…その覚悟を…するのが俺、か…（ボソツ）」

「ん？」

（ほう。そういう事か。）

「…ちつ。さつさと済ませろよ！」

バタンツ

。＊：。＊：＊：＊：＊：＊

ドアの前で待っている間緑は夢を見た。

「お、お父様？」

8歳位のネグリジエを着た少女がいる。

「ああ。…か。」

父と呼ばれる男性は白衣を着ていた。

「そ、れ…。」

「見てしまったのか…。」

鉄の台の上には赤い塊が入った瓶が置いてある。

ゆらゆらと浮いていて、微かに上下に動いている。

まるで、人間の…の様な…。

。＊：。＊：＊：＊：＊：＊

隣の部屋は資料室だった。しかし、資料室と言ってもほとんど何も無い。

「…何もねエ。…あ、クソ、ムシヤクシヤしやがる…!!」

▪ よく見たらどうだ？デスクがあるではないか。▪

「……机……。なんか入ってンのか…？？」

ガラッ

少年捜索中

……

「鍵……。」

▪ ほう。何処の鍵かな？

「……何処、つて……ここに鍵かかっている所なんざねエだろ。」

▪ さあな、あるかもしれないぞ？ 彼奴は一言もここには何も無い何て言っていないからな。ただ待ってると言っていただけだ。 ▪

「……。待ってろ、つて言うならここで何か問題を起こすなって事じゃねエのか？ 大人しくするという規則があるんだろ。」

▪ そういう事は言っていないかっただろう？ ふつ、お前も変わったな。そこまで慎重になるとは。今までは何でも殺しやあ良いみたいだな奴だったのに。 ▪

「……あの俺は違う」俺だ。今の俺は、一ミリでも規則を破るわけにはいかねエ立場なんだよ。」

▪ ほう。ならそうすれば良い。 ▪

「……まあ、いくら冷静になってもそもそも馬鹿頭は変わらねエからアンタの言う通り、何も壊さねエ様慎重に鍵の使う場所を探ささ。」

▪ そうか。 ▪

く少年捜索中く

……

「ハハ、ハハ、これは……」。」

## 十一章

### 灰色の部屋

少女は目を覚ます。何も言わず、ただ横たわっていた体を起こす。

ポロポロのデジタル時計はぴったり16:00を示している。穴あきだらけの布団。薄暗い灰色の部屋。

(4時…)

ガンガンッ!

重い扉が開く。

「…いるか?…」

「…はい。います…」

「そうか。行くぞ。」

「…」

少女はある男性について行く。10歳位だろう。背は普通。体型は痩せ型。茶色い髪をしていてフワフワ波打っていた。黒いズボンと白いTシャツという質素な格好をしていた。しかし顔立ちにはつきりしていて、髪質も綺麗なため、きちんとした格好を



すれば相当な美人になりそうだ。

「おい。今日はここだ。」

「…はい。」

「瑠衣と呼ばれたら一つ、佳菜と呼ばれたら二つ、智夏と呼ばれたら三つ渡せ。全部無くなったらしゃがめ。」

細い路地裏で男性は大量の封筒が入ったバックを渡していった。

少女待機中

10分後

「いたいた。佳菜ちゃん。」

「…。」

「ありがと。なー、ちよつと位喋ってよく。美人なんだから勿体無いぞー。」

「…。」

☒お買い上げありがとうございます。速やかにお帰りください。 ☒

暗い青い目で男を見上げ、メモを手渡した。

「はいよ。全く、今度はもうちよつと愛想よくしろよ。」

「…。」

同じような事が繰り返され、3時間程が過ぎた。少女に貰いに来る人間は様々だっ

た。女性もいたし、男性もいた。しかし、全員が揃って同じことを言った。

「美人」

皆揃って少女の美貌を褒めた。そしてうっとり青い瞳を見つめるのだった。

そして全ての封筒が無くなった。その場でしゃがむところに連れてきた男性が現れた。

「…帰るぞ。今日は終わりだ。」

「…はい。」

そして暗い部屋に戻る。どうやら少女の親はいないようだ。それどころか学校にも通っておらず、毎日このような生活を繰り返しているようだ。

しかし、ある日変わった。いつも通り16:00を示したデジタル時計を見つめていた。しかし、17:00になっても男性は来なかった。

「…。」

しかし少女は動揺しなかった。何故かというと、何度も同じ事があったからだ。その度に迎えに来る人間が変わった。

(仕方ない。起きよう。)

?

ある事に気がついた。

(鎖…邪魔…)

少女の足には鎖が繋がれている。

(3番目の人かな…)

チラリと腕を見る。まばらに蛇が巻きついたような螺旋状のアザがついている。しかし、青くなっているのではなく、アザはピンク色になっている。

少女を連れて行っていた人間は今までで5人いる。全員急に来なくなり、新しい人間が現れた。

ガチャツ

重い扉が簡単に開けられた。

「…。」

(ああ。振り向きたくない。次はどんな人なんだろう。3番目みたいな人は絶対嫌だ。)

3番目の人間は女性で、いわゆるサドといったところだ。常に少女を鎖で縛り付けていた。暴力も加えられた。3年位前の事だが、今でも体に無数のアザが残っている。

▷▷

ドスッ

「…ゲホッ…」

7歳位の少女が殴られている。口元には血が滲んでいる。

「…ああ。なんて綺麗な目…。」

今まで殴っていた女性は急に少女の顔を持って頭を撫でる。うつとりと少女の青い瞳を見つめている。

しかし、段々と女性の目の色が怒りの色に染まっていく。

ドスッ！

「…グッ…。」

「なんでっ、あんたみたいなガキなのっ！」

急にかんしゃくを起こし、少女を殴り女性は部屋を出て行った。

「…ゲホッ…ゲホゲホッ！」

少女は激しく咳き込んでいる。

(…私…どんな顔してるんだろう…。見た事ない。)

▷▷

振り向いた。

「おい、ついてこい。」

知らない男性がやって来た。

「…。」

「…自分で外せ。」

鍵を投げてきた。

自分で鎖を外して歩いて行く。今まで見たことも無いような立派な館についた。今でもはつきり覚えている。地下室に連れてこられた。隣には男の子がいた。オレンジみたいな色の髪の毛。今にも泣き出しそうな顔をしている。

「…姉ちゃん。」

!?

消え入りそうな声で姉ちゃんといった。きっと他人の空似だろう。

「…。」

「今からお前達に有る質問をしよう。上手く行けば出してやる。」

気づくと1人一つずつ檻に入っていた。皆7歳から10歳位。

（ああ。そつか。次はこの人か。次こそ死ねるかな。）

「…。」

泣いてる。凄く綺麗な服着てる。ママ、パパって言ってる。

（何言ってるの。こんな状況なんだから殺されるに決まってる。）

「…。」

「お前達、失って良いという者はあるか？」

「はい。」

（私は迷わない。やれと言われた事をするだけ。死ねと言われたら死ぬ。）  
！

「…何言つてんだよテメエ!?失つていいものなんてあるわけねえだろ！」

後ろから声が出た。同じ年位の金髪の子。

「よせっ!？」

隣にも男の子がいる。必死に止めてる。

「私…死に…た…いい。」

うまく声が出ない。今までほとんど喋らなかつたからだろうか。

「姉ちゃ…。」

！

「いこ。」

檻から出された。気づくと隣と後ろの2人、斜め前の人以外は死んでた。床が血の海だった。

（やけに静かだなと思つたら…。）

(絶望的な顔してる。今まで苦しんだことも無いような顔してた。幸せだな。苦しまないで死ねたんだ。いいな。)

「し…死んでる…。」

「おいつ！てめえ何平気な顔してんだよっ。」

異常な光景に後ろの2人、隣の男の子は動揺している。

汗が止まらない様だし、目に涙を浮かべている。

「人が死んでんだぞっ!？」

「…。」

その時少女は不思議な気持ちになった。今まではどうでもよかった事がとても残念に感じる。

「この気持ち…なんで…」

「あ?」

「…。」

その時ふと恐ろしくなった。昨日まで客に渡していたあの封筒には何が入っている?あの男性はどうなった?今までもどうでもよかった事が今思えばとても不気味だ。

震えが止まらない。

そう。今までの私は何も感じていなかった。殴られても痛くなんか無かった。

そして、何も考えて無かった。いや、考えることをやめていた。

「なんで…。」

自分が怖い。今までの私は人が死んでも何とも思わなかった。しかし今は

「か…わ…いそ…う…。」

とても残念に思う。普通の気持ち。この気持ちを思い出させてくれたのは…

「…桜舞。」



!

「レ……オ……君？」

「やっと思い出したか……。」

「な……んで……死んだんじや……。」

「俺はあんな薬で死なねえ。」

「……そつか。」

「死人をみて何も思わねえてめえは桜舞じやねえ。  
「うん。」

でもね、今だから言える。自分の為じゃない。他の誰でも無い、あなたのために……

「私……死にたい。」

そして、レオ君を助けたい。弟のカリナも。

今まで黙っていた男性は口を開いた。

「そうか。」

「桜舞っ!?!」

「姉ちゃんっ!?!」

もう一度、レオ君とカリナの顔を見る。

ああ。なんでもっと早く気づかなかつたんだろ。もうちよつと耳をすませば…聞こえた筈なのに。同じ叫び声が。

「さて。見せてもらおう。消え去つた成れの果てに見えるモノを―…」

「ねえ…ちゃん…」

。 \* : : \* . \* : \* . : \* . \* : \*

それからは一瞬だった。でも、私は今生きてる。なんでつて？

あの男は失敗したのよ。私に気づけなかつた。ただそれだけ。

廊下には無機質な靴とコンクリートのぶつかり合いの音が響いている。今は逃げな  
きや。そして、叶うなら…

「レオ君と…生きたい。」

## 十二章

## メタ発言やめい

「質問だ。」

見るからに冷酷そうな男性がこちらに振り返る。

「座れ。」

緊張感が張り詰める理科室の中、緑はゆっくり腰を下ろした。

「単刀直入に言わせてもらおう。…、いつまでか？」

!?

「何のことですか?」

緑の頬を汗が伝う。

「もう一度言う。…いつまでだ?」

……。

「申し訳ありません。何の事だか分かりませんわ。」

「…そうか。…。」

!

窓など無いはずなのにどこからか花の香りがした。

「…アイ…リス…？」

その花が何の花だか緑にはすぐ分かった。

品のある、清楚で爽やかな香り。

この香りは…

「権…お姉様…？」

「…。」

「……。」

!?

「あ……ああ……。」

「おねえさま。……\*……\*……\*……\*……\*……\*……\*」

「あら、……なあ……に？」



!

グツ!

。．\*：。．\*．：\*．。．\*．：\*．。．\*  
 「お嬢様っ!？」

!

「喋るなど言っただろう。」

「うるさいっ! あんたお嬢様に何したのっ? さっきから意味わかんない質問繰り返してっ!」

。．\*：。．\*．：\*．。．\*．：\*．。．\*

「黒い写真? ……これ撮ったやつ頭おかしいんじゃないの?」  
 と言いつつもじつと写真(?)を見つめるレオ。

「…何かの役に立つのかねエ…。 まあ、一応持つておくか。」

やや雑にぐしゃつと写真をポケットに入れ、辺りを再び見回す。

？ そんなに雑に扱っても良いのか??

「別に壊れやしねエだろ。…それに、破れたってたかが写真一枚だ。大した鍵にもならないだろ。」

？ …フツ。そうか。？

「…。他になんかねエかな…」

ゴトツ

！

「…何か落ちたのか?」

水色の石のようなものが落ちていた。

よく見ると鈍く光を放っている。

「…?…んだコレ。子供の玩具か?」

？ 一応持っていていたらどうだ?!

「こんな石つころを?…:…まあ、意味不明な写真もポケット入れたしな…。同じポケットに入れておくか。」

ガタツ

!

「戻って良いぞ。」

「…終わったのか？」

「ああ。」

「…。流石は手際のいいこつて。」

。 \* \* \* \* \*

「…。」

「…鍵。あつたわよ。」

「…そーか。」

「これをやる。…が思い出せば活用出来るだろう。」

「…ご親切にどーも。」

「早く行け。」

「…わーってるよ…って緑い!？」

黄熊に支えられながらグツタリとしている。

「…具合悪いのか!?!おい、しっかりしろ!」

「叫ぶんじゃないわよ、バカ!」

「あ”あ!?!”気絶したヤツの目を覚ますには叫ぶのが一番だろ!!?!”」

「気絶してるわけじゃ無いのよ。」

「は?」

「こいつによると…。」

「記憶を呼び戻しているだけだ。」

「…アンタらしいな。」

「早く連れて出ていけ。」

「…わーつてる。」

帰るときは普通に出ることが出来た。

「お嬢様。これは何の鍵だか分かりますか?」

「これ?これは…職員室…。」

「…センサーの集まる場所かよ…。」

「……センサー?」

「…あー、センサーの事だ」

? 久しぶりだな。このくんだり?」

「久しぶり、たつて数時間ぐらいだろうが。」

? 実際は7話ぶr…?

「メタ発言やめい。」

「ちよつと、さつきから何ブツブツ言ってるのよ。」

誰かいるの?」

「独り言だよ独り言。」

「そーお?ふつ、幽霊見えてるのって実はあんたなんじゃ無いのお?」

? こっちは5話b…?

「だからメタい。あと、サイコパスメイド、テメエ調子乗ってるな。お嬢様大好き変態野郎と一緒にされたくねエ。」

「は、はあっ!?!何言ってるのよアンタ?変態とかふざけんじやないわよ?好きって言ってたって尊敬だからね?レズな訳じやないわよ?あと何がメタいのよ?」

? メイドへのあだ名が一つ増えたな。?

「いや緑ン事考えただけでボケーツとニヤけてる奴のどこが変態じゃねエんだよ。メタいのはテメエの存在だ。」

「はあ?ふざけんじやないわよ。」

なんかさつきから見えない第3者がいる気がする…。」

「おー、出たでたサイコパスメイドの第六感〜」

「な、なによつ？第六感って？サイコパスじゃないし！」

「シックスセンスあんだろ。サイコパスメイド。」

「無いっ！絶対無いっ！」

？ ありそうだがな…。？

（なんかイラつく…。何なの？この誰か喋ってる感。）

「おい、口に出てんぞ。やっぱ見えない声聞こえてんじやねエか。」

「それはあんたでしょっ!？」

「俺にシックスセンスはありません。シリアルキラーであつてサイコパスじゃありま

せーん。」

「黙れっ！シリアルキラーな所で充分サイコパスだわ!？」

「シリアルキラーは人殺し。サイコパスは見えねエモンが見える奴のことだろうが。日

本語の勉強してこい。」

「精神病気質の事よお？あんたの場合日本語の前に義務教育受けてきたらあ？」

「はっ、これでも十八歳だぜ？義務教育はバッチリ受けてるんだよ、サイコパスメイド。」

「あつらあ、ごめんなさい？童顔だから中学生かと思つたわあ？」

? メイドの顔も十分おさな…?

「そのセリフ、そっくりそのまま返すつての。テメエの顔を鏡で見ってから言いな？」

「はあ？」

(さつきから何なのよ、絶対なんか言つたでしょ?)

「テメエの方が俺より童顔だよチビ。」

「づっ…。た、たしかに147cmしかないけどさ…。」

? チビだな。?

「うわちっさ！お前くらいの歳なら150超えてんのが普通だろ？チビ通り越してどチビだな!!!」

「う、うっさい！私の年齢知らないくせにつ！」

? スタイルも子供っぽいな。?

「どうせ15か16くらいだろ？スタイルもガキだなあ？」

「づ、づっさいっ！」

? お嬢様の方がスタイルが良いな。?

「こりや、緑の方が全然スタイルもいいねえ。」

「うっ！」

(た、たしかにお嬢様の方がスタイル良いわよ！全然お食事を召し上がらないのに身長

が155cmくらいおありよ！ウエストも凄い綺麗に細くていらっしやるし！お肌もツヤツヤで白くていらっしやるし！脚長いし細くていらっしやるし！髪の毛もサラサラでいらっしやるし！な、なんで？)

「いやあ、不思議だねえ。遺伝子的に美人なんだろうなあ〜？」

？ フツ、DNAには逆らえないな…。？

「残念だったな〜。まあ、整形すればどうにかなる時代だけだな!!!」

「ばっ、バカっ!!!誰が整形なんかするかよっ!!?童顔くらい自分で何とかするわよっ!ス、スタイルだってもうちよつと年齢が上がればっ…!」

「無理無理無理。その歳でもうちよつともクソもねエって。あと童顔なんてそう簡単に治るわけねエだろ。」

┌

？ 年下で十分過ぎるほどの美人が近くにいないか？

「ごう」

「…ま、そ・れ・に…」

レオがニヤつきながら緑を見る。

「緑みてエな美人がいたらお前なんてただの引き立て役になっちまうしな!」

？ 引き立て役と言うか、裏方ではないか??



「あ、悪い悪い引き立てつつーか裏方だったな!!」

「ごうっ! だっ、黙れ! このサイコパスめ! だあれがサイコパスよ! あんたの方が十分サイコパスよ! この変態! お嬢様をどんな目で見てんのよっ!」

「お前より断然美人だし性格も美人な女として最高なやつだと思つてたけどー?」

? どちらに一票?

「ごっ!」

「それに比べてチビでガサツな暴力女だな、テメエは。」

「ごうっ… 黙れ変態っ! チビで悪かったわねっ!」

「変態じゃねエよ。俺はありのままの事実を述べただけだつて。」

「も、もういいっ! さっさと行くわよっ!」

「へーへー。仰せのままにー」

「おこ○やま戦争っ?」

? 自主規制入つとるぞ? ?

「お前いきなりボカロ混ぜんな。」

「言つたのあんたでしょ!」

「…う、ううん…。」

「お、お嬢様！」

「お、目、覚ましたか？」

「え、ええ。ぷ、黄熊…。そ、その人形は…？」

震える指で指さしたのはさっきの男から渡された犬のぬいぐるみだった。

「これですか？これは先ほどの男が、誰かが使い方を思い出せばと言つて渡してきたものです。」

「…。」

「こ、これは…。」

「私の……コロナ……？」



ドコカシラ♪

ワタシノタイセツナタカラモノ♪

シロイキレイナタカラモノ♪

°・\*∴°・\*∴\*∴\*∴°∴°∴\*∴\*∴°∴\*

歌？

ああ。なんて五月蠅いのだろう。

宝物？知った事では無い。

耳が痛い。

黙れ。

黙れ。

黙れ。 ……だまれ。 ……だ…まれ、 ……ダメレ。

ダメレダメレダメレダメレ…マレマレ…ダメレ…ダメ…ダメレ…ダメ…ダメレ…ダメ…ダメダメダメマレレ  
レ…ダメレツ！

気づくと静かになっていた。脚元には鳥籠が転がっていた。紅い。鳥籠。

その鳥籠は、とても大きかった。  
まるで、

ヒトガハイレルクライニ…。

。\*…\*…\*…\*…\*…\*

「…まあた用途不明のもんが増えたなあ…」

「ちよつあんた、用途不明って…。」

「武器にもなんねーし使うにもバラす位しか使い道ねーだろ。」

「バラさないでよ?」

黄熊がギロりとレオを睨んだ。

しかし、

? 迫力無いな?

「ブツ!!! 迫力もクソもへったくれもねー!!! ウケるわー!!!」

「あの…、職員室につきましたわ。」

「おー。」

「あの…このぬいぐるみはどう致しましょうか？」

「あつ…。申し訳ないのだけれど持つていてくれるかしら？」

「かしこまりました。お嬢様！」

（よつしや、よつしやああ！最近メイドっぽい活躍無かったからめつき嬉しいっ！お嬢様に頼つて頂けたああああーっ!!）

「…ぬいぐるみ一つで発狂するメイド、これ如何に。」

？ それなw？

「は、はあ？かしこまりましたって言っただけじゃないのお？な、なんで発狂なのよお？」

「…テメエ、1回鏡で顔みてこい…」

「は、はあ？な、何のことお？」

「…あの…、そろそろ行きませんか？」

「お、そうだったな。いざ出陣！」

「出陣？レオさんは昔の將軍の方ですか？」

「まあ、言葉のあやだよ。細けエことは気にすんな」

「は、はい…。…？」



「おらとつとと行くぞ。」

「あ、あのお……。」

「んあ？……んだよ今忙しいんだよこつちは。」

「す、すみませえん。あのお、これえ、落としましたよお？」

アンニユイな喋り方で鍵を渡してきた。

「ん？……鍵？」

「私達はこの鍵以外は持ってないわよ？」

「おいお前、俺が落としたってことか？」

「いえいええ、そこのお嬢さんのお、持っていたあ、ぬいぐるみからあ、落ちましたよお  
?」

そう言つて緑を指さしたのは、縦ロールのピンク色の髪をした20歳位の女の人。口  
リータ風の服を着ている。

※ここから『』は無言会話です。

『な、なんかこいつやばそうよ……?』

『お、おう。ラリつてんじゃね?』

? 人を見た目で判断するでない?

『目がやばいわよ。』

『マジキチだろ』

『あの酔っ払ってる様なとろーんとした目はやばいわよ。シリアルキラーかしら…?』

『あんなのと一緒にすんな! 気色悪イ!』

『あんた以上よ、きつと…。』

『あ? だとしたら殺気も何もねーだろアイツ。それにあんな変な目はしてねーつての  
!』

『きつと不意打ちで殺るのよ』

『…やめたやめた。殺す殺される理論は。単に酔っ払つてるとかじゃねえのか?』

『…あ、あの…、貴方様はどちら様でいらつしやいますの?』

『あらあらあ! お嬢さん、もしかしてえ、本物お?』

『ほ、本物?』

『す、素敵い! いいわねえ! 羨ましいわあ。なんて清楚で可憐なんですよ!』

『あ、あの…。』

『ああ、私い? 私はあ、リリリって言いますう。』

(黄熊) 『リリ○リ★バーニングナイト!』

(レオ) 『リリリ○★バーニングナイト!』

『おいおい…冗談だろ?』

『ボーカロイドのL♡yがコスプレしたみたいね…。』

たしかにその人はボーカロイドのL♡yのような顔だった。喋り方とか、髪の毛とか服とか全然違うけど…。

『……イタい、つつーには似合ってたよなあ、クソツ。』

『ねー。』

『あー、ほんといやらしい奴…』

『は？誰が？』

『リリリとかいうふざけた名前の奴だよ。あ、もしかしてサイコパスメイド、自分の事だと思っただけ？悪イ悪イ♪』

『はあ？そんなわけ無いでしょ。』

『……つまんねー反応』

「あのお、あなたがたはあ、何故ここにいるのでしょうか？」

「…んなモンこつちが知りてエっての。目が覚めて気がついたらここなんだよ、俺らは。」

「あらあ、やつぱりい、そおなんですわね！私も同じですわ。気づいたらあ、この学校みたいな所にい、居たんですわ。何故でしょお〜？」

「…知らねエよ。お前、自分で考えたらどうなんだよ…」

「あらあ、私もお、考えましたわあ。」

「…俺だつて考えたよ。けど、わからねエんだ…」

「わあ、そおなんですネ〜？」

「…、ならあ、ならならあ、ヒントをお、あげましょお。」

「……………は？」

「だからあ、ヒントですう。欲しいですかあ？」

「…そりゃ欲しいけどよ…。お前、なんも知らねエんじやねエのか？」

「ええ、知りませんよお、この事はあ。」

「…。まあ、教えてくれんならさっさと教えてくれ。使えねー頭使ってたら脳味噌が煮えちまいそうだ。」

「メイ様って知ってますう？」

「……………いや。」

「あらあ……………そおなんですかあ？」

「……………そーだよ。んで？そいつに何か関係でもあんのか？」

「もちろんですわあ、大ありです。」

「…。その関係云々はどーでもいい。早くヒント教えろ。」

「メイ様はあ、女王ですう。」

「…で？」

「ふふ、だからあ、女王様だって言ってるじゃないですかあ。」

「…女王だから何だってんだ。部下引き連れてる飾りみてエなもんだろーが。」

「いいえ、全然違いますう。」

「じゃあなんだよ。」

「女王様はあ、女王ですう。」

「…あんたさつきから何なのよ？言ってる事の意味がわからないわ!？」

「サイコパスメイドに同意」

「あらあらあ、分からないのお？」

「…。」

「…。」

「……………星街。」

「ここまで言えばあ、解るかしらあ？」

「っ！……………」

「凶星よねえ。だって……………」



「ワタシノイチバンキライナバシヨダモノ」  
「…。じゃあ何でいるんだよ、テメエはよ。」

「……もちろん、逃げテ来タニ…決まっテるジャあナイ。」  
ニッコリ微笑んで彼女は言った。

「∴精神崩壊と引換にかよ。」

「まあ、ソナ感じかしらねえ。でもお、まだア、壊れ切つてはあ、イナイわあ。」

「寸前だろうが。彼処に行つちまつたテメエの命運は既に決まつてんだよ。」

「そおねえ。貴方、私の年齢∴知ってるう？」

「∴。知らね。まあでも、そこそこ居たんだろ？」

「そおね。ずうーっつと叶うと思つてたのお。馬鹿よねえ。」

「俺より馬鹿だろ、テメエ。…ま、逃げ出せるくらいならそこまででもねエか。」

「そおかしらあ？大変だったわあ。でも…もう…永くは無いわあ。私。」

そう言つた時、リリリの頬を涙が伝つた。

「……。永くねエなら、残された時間、悔いのないように生きろよ。」

「そおね。出来るなら、そおしたいわ……。でもお……。出れないじゃあ、ない？」

ゲ  
ホ  
ッ  
……

リ  
リ  
リ  
は  
吐  
血  
し  
た  
。

「あそこ、おんなじねえ。なんて、残酷な…世界なんですよ？」

「そりやそーさ。人生、上手くいく方が少ねエ。でも、テメエはまだ幸運な方さ。あの地獄から抜け出せたんだからな。」

「そおね。」

そして、ゆつくりと、リリリは床に座った。

「それじゃあ、またね。また何処かで…会いましょう。」

ゆつくり、目を閉じた。

「桜舞ちゃんに…よろしくね。」

「…ああ。」

伝えておくよ、とレオは呟く。

「…姉さんが、リリリが、やっと、地獄から解放されたってな。」

「あり……が……とお……………」

そしてまた、一筋の雫が、リリリの頬を伝った。

そして、静かに…

地獄にいたはずなのに、驚くほど幸せそうな顔をしていた。

3人はゆつくりとその場を立ち去った。

そして、幾らか時間がたった。

ああ。こんなに安らかに眠れたのは、いつぶりだろう。例え、逃げきれなかったとしても、こんなに静かな、どこまでも冷たい、この場所で。

バンツ

そして、1輪の華が散った。



## 十四章

## 桜舞とカリナの関係

!?

「…………お、お嬢様…？コロンは…」

コロンと呼ばれている犬のぬいぐるみは、真つ白でまるで本物の毛皮を使っているようだった。

「あ？んだこれ。人形……にしちやリアルすぎねえか？」

レオが黄熊からぬいぐるみをやや乱暴に手からとってまじまじと見つめる

「……………？」

!?

「んぎやつ?!?おい、此奴首千切れてんじゃねえか!!?」

「っへ!?!」

「ち…ちよつとととととと、う、嘘でしょ（（； ㇿ（（（ガクガクブルブル」

よく見るとそのぬいぐるみの首には千切れた跡があつた…。そこからは赤茶色い物が滲んでいる。

「…あ、あの…。どうかしたんですの?」

「…。緑、サイコパスメイド。少し後ろを向いてろ。」

ぶっちいー！

「な、なんかすごいエグい音したけど…。」

「気にしたら負けるぞ、サイコパスメイド。」

コロン…

コロコロコロコロ…

!?

「つきやあああああああ！」

黄熊が3mほど跳ね上がっている

「……………め、目玉……………」

ぬいぐるみの首から落ちた物は後ろを向いていた緑達の方に転がって行つた。黒目の部分が綺麗な空色になっている。

「……りゃ、本物だな。つてことはガキの死体ミンチにして詰めたのか……うへえ、悪趣味な奴だなあ。」

「っ何でそんな想像に至るのよっ！（（；；；；；；；；；；）カタカタカタカタカタカタカタ」

目玉はガチャガチャのケースの様な透明なケースに入っていて、水のようなものにフワフワ浮いている。

「……んー、何に使うんだ？これ。誰かに返せばいいのか？マネキンみてーに。」

「……………」

「……………桜舞様の片目にそっくりですわ…！」

「……………言われてみりゃあそうだな。……………彼奴の、左眼……………」

カツ……………

遠くからローファーで歩く音がする…

「う……………う……………」

!?

「……………つれオ君……………？」

「……………桜舞……………」

そこに来たのは左手が傷だらけの桜舞だった。

元々彼女も肌が白く、綺麗な手をしていたため余計に痛々しい。

「……………！……………桜舞様……………、あ、足が……………」

よく見ると左足首の裏にも手と同じようなカミソリの刃で何度も切りつけたような跡があった。

「っ!?!おい、何があった!?!」

「…カっ…カリナが…。」

タツタツタツ…

「ね、姉さん!?!大丈夫?」

そこに来たのはさつき会ったときより5歳ほど大人びたオレンジのフワフワした髪を持つた愛くるしい顔をした少年だった。

「カリナ…?…なあ、桜舞に何があったんだ!?!」

「姉さんが僕の代わりに星町に行こうとしたんだっ!!」

「……は？ほし……まち……に……？」

「そうだよっ！メイ様の命令で僕が指名されたんだ！1人いなくなったから！」

（……っ……リリリの事か……）

「……でも、何だってお前を指名したんだ？彼奴だつて”規則”はあるだろ!」

「……いい、急ぎなのよ……。1番人気の方がいなくなったから……。カリナは女の子よりの顔してるから面白いだろうって……。」

「……っ姉さん！……だからって……姉さんが行く必要はないよ！」

「おい……何でんな浅い傷ばつかついてんだ？」



「向こうに連れて行かれましたらまず片足の健を切られるんだ。姉さんはそれが嫌で抵抗したんだ。あの方を殺して逃げるつもりだったから…。」

「…だけど、失敗して這う這うの体で逃げ出したのか。お前、よく生きてたな。」

ゼエゼエ…

「っ…それは…私は誰だと思ってるのよ…。。まだ星も飲んで無いわよ。」

「ゼエゼエ…。。でもね、星町の子を何人か逃がしてきたの…。見かけたら、できたら出良いの。優しく楽にしてあげて。もう長く無い。」

「わかった。…テメエらはどうすんだ？」

「取り敢えず…リリリ姉様に会いに行くわ…。」

「……！リリリは……死んだ。」

!?

「……リリリ姉様が……？」

「……ああ。星街から逃げ出して、死んだ。お前らをよろしくって言ってな。」

「……。。。」

「あなた達の目の前で……？」

「……そうだ。」

「……本当に？」

「……俺がお前に嘘をついたか？」

「ううん。……ねえ、カリナ？」

「……！……うん。」

「……ねえ。レオ君？星町に行つて星を飲まされた人間はね……。」

「自分では死ねないのよ？」

「……はっ？お前……何……言っ……」

「私……銃使うでしょ？上手く撃ち込むと死ぬの。私はたまたまコツを見つけたら、内緒で望んだ子を楽にしてあげてたのよ。」

「……それで、あいつにバレたのか。」

「そうね。……だからリリリ姉様は他殺よ。弾丸を持っているのは私とあいつしかないもの。」

「……なるほどな。会ったのか？あいつに。」

「…勿論。」

「…笑っちゃうよね。あいつ、姉さんの事好きなんだよ。」

「…それは、あいつなりに楽にさせてやろうと思ったんだろ。…てか、お前漢字使えたのか…だいが大人びてたな。」

「…うん。あっちに行かされそうになったからね。」

「そうね。私も怒ってないわ。私だって…そんな姿のリリリ姉様を見たらそうする。」

「そうか…」

「あと……これ、あの子達に使ってあげて。」

そう言つてレオに桜色の見事なガラス細工が施された箱を渡す。  
中には弾丸が七つ。光によって七色に輝いている。

「銃……持つてる？」

それとも……緑様の前で使うのは気が引ける？」

「持つてねエし、目の前で殺れば多分緑が倒れちまうからな……。気は引けるさ。」

「……そう……よね。そういう光景を目の当たりにさせるのは良くないと思う。」

「……………上手くいくかあなた次第だけど……、これ、飲ませてみて。私も何回かしか  
やったことないけれど。」

これとは桜舞が渡した弾丸の事である。

「……………レオ君。」



「…なんだ？」

「……………信じてるね。」

そう言って笑った桜舞の笑顔は、どこかで見たた事がある幼くて可愛らしい物だった。

